
COBALT-SERIES
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖の剣 6
鬱金の暁闇 15
うこんのぎょうあん
集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 15

前田珠子

集英社

Fate/Grand Order



COBALT-SERIES

破妖の剣 6

鬱金の暁闇15

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 15

第四十五章　二つの鍵（後）……13
第四十六章　母と娘……39
第四十七章　摑みとるもの……99
向日葵の海……141
もし破妖が学園ものだったら……182
マンガ　破妖☆学園 ～ラス子はふり向かない～……186
あとがき……201

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリール(ラス)は、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼしたラスは、父の配下の魔性や紅蓮姫奪還チームに追われ、護り手の闇主とともに逃亡していた。しかし父によって仮死状態にされ、永い眠りにつく。その後紅蓮姫の第二の使い手として、奪還チームの一人であるアーゼンターラが選ばれる。そんななか第六の妖主（雛の君）が誕生。妖主たちを配下に従え、世界を破滅へ導こうとしていた。母チェリクによってラスの意識は永い眠りから目覚め、肉体へ戻ったが、雛の君は世界の破滅を導く『破壊の鍵』を取り出すことに成功する。ラスは雛の君に対峙するが、そこに現れたのは弟の身体に入った実父・金の妖主だった。父に刃を向けることをためらっていたラスも遂に迷いを捨て、父の心臓に紅蓮姫を突き立てる。そんなラスを父は認め、雛の君と等しく、新たな世界の「女皇」となる資格があると宣言するのだが…!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白



白焔の妖主(白煉)
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。

夫婦?

紫



紫紺の妖主(藍絲)
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

娘



息子

ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンターラ(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

姉弟



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。

マイタード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

チェリク
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

親友

夫婦



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。

息子



乱華（リーダイル）
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。



濫花（リー）
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主（千禍）
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第四十五章　二つの鍵(後)

3

真冬の曙光（しょこう）――。

そう、思った……いや、感じたと言うべきか。

肉体とともにある状態から切り離された……魂（たましい）とすら呼べない、命そのものとしてしか存在していなかったアーゼンターラが、その瞬間におぼろげながら受けたと思ったもの。

認識したと思えたもの。

いや、もっと根源的な部分で、やはり「感じ取った」としか言えないなにか。

それは、一言に収束される。

真冬の曙光――ただ、この一言に。

※

アーゼンターラがアーゼンターラとして記憶している最後の出来事は、これまで感じたことのない衝撃と、痛みと、知らぬ誰かの宣言だった。

お疲れ様、と言われたような気がした直後、胸に大きな痛みと衝撃を覚えたのを最後に、意識がなくなった。

それは、浅い眠りに無理矢理落とされたのにも似ていて、始終落ち着くことができない、気持ちの悪い時間だった。

『ターラ、ターラ、ターラ！』

親しい少女の泣き声は常に聞こえてくるし、

『ターラ、しっかりおし！』

馴染みの年上の女性の叱責は投げつけられるし、

『ターラ、頼むから目覚めてくれよ』

と、やはり馴染みの青年の、これまで聞いたこともない気弱な声は聞こえてくるし、

『ターラ……』

名を呼んだきり、押し黙る……やはり馴染みの男性の沈黙は重いときたらないし。

呼ばれる度に、アーゼンターラ自身ものすごく落ち着かないし、苛立った。

言っては何だが、

「わたしだって、好きでこんな状況に陥ってるわけじゃないわよっ！」

と、大声で主張したいぐらいだった。

だが、そうすることさえ、当時のアーゼンターラには許されなかった。

彼女の意志などはなから無視した、絶対的拘束力に満ちた力の編んだ網だか縄だか紐が、がんじがらめに彼女そのものを縛りつけていたのだ。

そして、本当に小さな、懐にでもひょいと放り込めるぐらいに小さな塊にされたアーゼンターラは、自由に思うこと、考えること、望むこと、願うことさえもはぎ取られた状態で、誰かの……何者かの手の中に置かれていた。

蜜里の泣き声を止めてやりたいのに。

スラヴィエーラやマイダードやオルグァンに「大丈夫」だと告げて、少しでも安心してもらいたいのに。

そして、璃岩城で別れたきりになってしまったリメラトーンのことを聞きたいのに。

何も……何一つ、自分の自由にならない。

それは無理のないことだった。

この時アーゼンターラの命と魂は、世界を支える五要の一たる紫紺の妖主を倒したことにより生じた「破壊の鍵」という、大きすぎる存在に呑み込まれていたのだから！

誰かが、その新たに生まれた存在ごと、自分を懐に入れようとする。

それは、恐ろしい存在だった。

懐に抱かれたが最後、大きすぎるうねりに呑み込まれようとしているこの意志も存在すらも、新たに生まれた何かの一部に否応なく変えられてしまう。

消えてしまう。

変えられてしまう。

違う。

これまでの自分は消し去られ、まったく違うものに作り替えられてしまうのだ！

そんなこと、一度として望んだこととてなかったというのに！

『いやよ、いやよ……そんなこと、絶対に……！』

強大すぎる存在に『モノ』としか扱われなかったがゆえに、『モノ』としての諦めを自らに課そうとしていた彼女はしかし、最後の最後で反抗を選んだ。

『いやっっ！』

強い、強い意志で、運命を、今この時自らを見舞っている現実を拒んだ。

冗談ではない、と思った。

心臓を引き絞られるほどの痛みも悔いも、その果てにたどり着いた、血を吐いてでも先へ進むと決めた心まで、全部。

誰かが用意していたのだ、など……どうして認められようか。

『絶対に、いやっっ！』

最早、摘み取られるのを待つばかりにも等しき身――わかっていても、伝えずには

いられない……伝えることで、何かが変わるかもしれないと、期待することを止められない……。

そんなものは、強大な力を前にしてみれば、取るに足らない些細な抵抗に過ぎない。

本当に、微々たる抵抗に過ぎないはずのことだった。

だが――。

どこまでも抵抗する少女の意識……あるいは命とも呼ぶべき存在に、関心を抱いたモノはいたのだ。

それは、けれど安堵できる存在ではなかった。

恐ろしい存在であることに変わりはなかった。

だが、するりと恐ろしい手からやはり恐ろしい手にその身を移された瞬間、アーゼンターラであった魂とも意識ともつかぬ存在は、安堵にも似た息をついたのである。

それがなぜかもわからぬまま、無造作に無感情に命のみを抜き取られた少女は、その自分でも理解できない一瞬――すくい上げられた、と感じた。

それは、闇――。

闇だけれど……とても優しいものに、感じた。
まるで、真冬の空を照らす太陽のように――。
たとえ空が曇っていても、どれほど厚い雲が空を覆っていたとしても――その上には間違いなく陽が輝いているのだと。
そう信じられる何かがある――そうと信じられる、何かが。
誰かが、何かが、自分の運命をすり替えてくれた。
素直にそう信じることができた。
その果てに、見えたのだ――あの冬の朝の曙光が――！
凍てついた世界に射し込む一条の光。
世界を溶かせる熱はなくとも、目にする者の心に熱を、温もりを与える朱金の光
――それが少女を照らしたのだ。
その刹那、アーゼンターラは強烈に希求した。
帰りたい――戻りたい！
自分がいた場所、いやいるべき場所に。

大切なひとたちがいる場所、いっしょに生きていきたいひとたちがいる場所、失いたくない存在が在る場所――自分が生きる、世界。

膨れて溢れた衝動のまま、飛び出した彼女に、必死に呼びかける声が聞こえたような気がしたけれど、大きすぎる望みの前に、それはあまりにも小さく、彼女の動きを止められるものではなかった。

『……っっ！　……だっ！』

何を言われているのかわからない。

いや、その言葉が届いたとしても、アーゼンターラは動きを止めなかっただろう。

それは、強烈で絶対の望みにして決意。

皆とともに生きる。

それだけを自らに刻んだ果ての行動だったのだから！

『……っ！』

聞こえない、止まらない。

一刻も早く、皆のもとへ帰ることしか考えられない。

標ひとつない状況で、どうやって帰るのかすらわからなくとも、それでも決意は揺るぎなく、ただひとつの願いが占める心は止まらない。

早く、早く、早く、早く！

焦がれるままに、制止の声を振り切り、あてもない世界に飛び出そうとした正にその刹那――泣きたくなるほど愛しい少女の声が聞こえた。

『ターラ！』

同時に、標のない世界に、ただひとつの道が拓かれたことを感じた。

『ターラ！　こちらよ、ここにわたしは……わたしたちはいる！』

帰ってきて！

血を吐くようなその声の主を、アーゼンターラが間違うわけがない。

蜜里！

少女の名を思い浮かべるより先に、彼女の命はその声を求めて、今度こそ飛び出した。

そこそが、自分が帰るべき場所だと、いるべき所なのだと……そして、新たな一

歩を踏み出すための世界なのだと、アーゼンターラの命は確信していたのだ。

4

世界を覆う蒼穹を切り裂く巨大な虚――。
そこに雲のごとき細き絆で結ばれた虚空に浮かぶ真球の空間。
今や世界を支配する女皇の居城となったその城の広間にて。
漆黒の闇を身に纏う少女――女皇は、この世界最古の存在である王蜜の妖主の告白に身を震わせていた。
その傍らに立つのは、自分とは違い、人間の母親譲りの黒髪と、魔性の王たる父親から受け継いだ金の左目と、後天的に与えられた深紅の魔王の右目を持つ娘だ。
事情を知らされたのは、今の今なのだろう。
驚愕に大きく目を瞠り、戸惑いに揺れているのがわかる。

今なら、何の苦労もなく、自覚のない娘の命は刈り取れるに違いない。
父たる王蜜の妖主の言葉の半分も、恐らくは理解できていない――それゆえに、この敵地においてすら戸惑う姿を晒しているこの状況であれば。
だが、女皇はそうはしなかった。
したくなかったのだ。
ざわり、ざわり、と全身の肌が粟立つような寒気と熱が内側から湧き上がってくるのを感じる。
寒気……それは、生まれ落ちてより初めて感じるものだ。
聞いた話では、脅威となる存在を前にした時、感じるものだという。
熱は……何となく、わかる。
喜びがもたらすものだ。王蜜の妖主に横槍を入れられたことで一度中断したこの娘との戦いが、今度こそ何者の邪魔もなく実現すると確信するがゆえに。
ああ、と思う。
なぜ、彼女が気になって仕方なかったのか――その理由がようやくわかった、と。

歓喜と安堵の相半ばする感情を噛みしめながら、少女の姿をとる世界の王は、長くはないが短くも感じられなかった誕生以来の記憶を辿った。

絶対主として生まれたがゆえに、他の何者とも共有できなかった想いとともに――。

※

生まれ落ちたとき、彼女は無力だった。

それは創造主によって定められたことだった。

この世界の幕を引く最後の妖主にして世界の女皇は、力というものを持たずに生まれ落ちてくる。

そうと定められた身であることを、彼女は意識が生じると同時に受け入れていた。

だから、無力な自分を守るための画策を為した。

無力であるうちだけに許される、冥の海からの配下の補充――我が身に力が満ちるまでの、間に合わせの戦力となる配下を、自由に選べるよう設定された特権。

充分な力を手に入れた時、ようやく女皇としての活動を開始した。
女皇の資格はある意味単純なものだった。
世界を支える要石――五要の妖主より後に生まれし者であること。
五要全てを従えること。
それもまた、さして難しいことではなかった。
創造主の命令は絶対であり、その意志によって力を蓄えた自身の力が他の妖主に劣るなどとは考えもしなかった。
世界の主として、望むことを為せ――。
女皇の魂に刻まれた言葉は、どれも容易なことであり、だからこそ彼女は小さな不安を抱いた。
冥の海から拾い上げた配下たちを見ていなければ、抱かなかったかもしれない疑問がその源にある。
彼女が当座の戦力として集めた蘇生者たちは、絶対の束縛を受けた身でありながら、やはり生前の記憶に強く縛られている者が多かった。

魔性における力の源は、実のところは命数などではなく、どれほど強い想いを抱いているか、だ。即戦力になる存在を求めた時点で、強いこだわりを持つ者ばかりが集まったという事実に気づいたとき、彼女は自身の立ち位置というものに対して漠然たる疑問を覚えた。

世界の命運を決する唯一にして最強の女皇。

世界のあらゆる眷属は、無条件に自分に頭を垂れ、忠誠を誓う。

自分とは、そうと創造主に定められた存在のはずだ。この身が生まれ落ちた瞬間から、世界は自分の支配下に置かれたはずだ。

だが――。

無力な身に生まれる――という条件のせいだろうか、生まれたこの世界は、ちっとも自分のものだという気がしなかった。

いずれ、我がものとなることを疑ったことはないが、それでも世界は自分の意志――すなわち創造主の定めからさえ自由になろうと足掻いているように感じた。

冥の海から集めた者たちは、一度死した身として、決して生前のことを語ったり懐

かしがる様子は見せなかったが、会話を重ねれば、彼らが何かに、誰かに、強い執着を未だに抱いていることは感じ取れた——その想いの強さこそが、死してなお、自分の駒として充分な力を有するその理由なのだと。

世界は自分のもののはずだ。

創造主が、そうと定めた。

世界にあって、それ以上の絶対の意志はないはずだ。

存在そのものの根源とも呼ぶべき核に、深くそう刻み込まれている——だのに、なぜだろう……それを素直に信じられない。

だが、それは自分が未だ完全に世界の主たる資格を持たないせいだと、その時は心に言い聞かせた。

五要の頂点に立つべき存在として生まれ落ちはしたものの、その時点で自分は彼らを従えてはいなかった。

欠けた翡翠の力は無条件にこの身に流れ込んできたものの、それはかつて存在した意志と力の全てではなかった。

抗うのか。

頂点と定められたこの身に、従うべきこの世界は抗うことを選ぶのか。

その可能性に気づいた瞬間、ぶるりと身を震わせたのは、衝撃や動揺ではなかった——ぞくぞくするほどの興奮だった。

この世界は、創造主の意志すら素直には受け入れない暴れ馬なのだと感じた刹那、女皇の全身を支配したのは違えようのない歓喜の念だった。

自覚はなかったが、それこそ、彼女が望んでいた展開だった。

無力なままの身が、世界を従えることなど、到底かなわぬと誰より自身がわかっていた。

力を蓄えることで、自らの力が女皇と名乗るに相応しい領域に達したことを自覚した彼女は、どこかでそれを示したいと思っていた。

女皇の証は、それまで世界を支え続けてきた五要を悉く従えること。

ならば——。

従えてみせよう、全力をもって！

そうして、示してみせよう、自分こそがこの世界の頂点に相応しい唯一の存在だと！

歓喜の中で決意した女皇は、しかし肩すかしとも呼ぶべき状況に見舞われる。

最初に感じた世界自体の叛意が嘘のように、世界最古の存在が真っ先に彼女のもとを訪れて膝を折った。

二番目に生まれたという深紅の魔王も膝を折る——これは、経験値のない彼女ですら疑うに充分な怪しげなシロモノにすぎなかったのだけれど。

三番目に生まれた翡翠の魔王はすでに無く、四番目に生まれた紫紺の妖主も容易く自らの前で膝を折った。

拍子抜けもいいところだ。

いや、これで最後の白焔の妖主までもが、難なく頭を垂れたとあれば、逆に不審を抱いたかもしれない——創造主の意図に反する世界が、創造主のもたらした自分にいったいどんな反逆の意志を隠すのか、と。

しかし、誇り高き処女雪の如き輝きと苛烈さを持つ女性は、戦いの結果を以て自ら

の運命を定めると宣言し、それを守った。

勝利の果てに勝ち取った忠誠だからこそ、無条件に信じられると思った。

だから、彼女を捨て石にする選択肢は最初から捨てていた。

自分が正しく『女皇』となるために必要不可欠な存在――世界を破壊し得る『鍵』を生み出すために、彼女の命は使うまいと思った。

破壊の鍵を作り上げるためには、五要のひとつの消滅が必須条件だ。白焔の妖主を除けば、使える存在は三人に絞られる。

王蜜、柘榴、紫紺の妖主――。

最も相応しいと思ったのは柘榴の妖主だ。かけらも敬意を抱いていないことを隠しもせぬくせに、平気な顔で近づいてくる顔を見る度、唾棄したくなるほど嫌悪する相手だ。消滅してくれれば清々するというものだ。

だが、油断ならない狡猾さをも感じ取れる相手だけに、選ぶのは難しかった。

破壊の鍵となり得る娘はただのひとりだ。これ以上準備に時間を割きたくない以上、事は慎重に進める必要があり、その計画に深紅の魔王を組み込むことは不安要素が大

きすぎた。

新たな世界のために、命を喜んで差し出す妖主はひとりとしていないだろうことはわかっていたが、深紅の青年は何をするかわからぬ得体の知れなさがある。

いかような手を用いて、自分を出し抜くかもしれない。

単にやり過ごすだけならまだいいが、鍵となる少女の命を散らしてしまうかもしれない……否、事によっては二度と鍵となる可能性を持つ存在が生まれないよう、時間に細工を施すことさえやりかねない。

失敗することを前提にするつもりはなかったが、永遠に完璧な存在になれぬ可能性は排除すべきだと考えた時、どれほど厭わしかろうと、彼を用いることは控えるべきだという結論に達したのだ。

たとえ背後で彼が何を企てようが、鍵さえ手にしてしまえば自分の勝ちだ。

創造主が定め、世界が認めた皇とさえなれば、彼にできることはない——新たな世界に彼の居場所を用意する必要もない。

そう……心定めて、それは為った——はずだった。

完全なる、完璧な存在になったはずの自分の前に、最初の鍵たる娘が現れた時も、戦いへの期待に胸を震わせるだけだった。

王蜜の妖主の横槍を受け入れたのも、彼に阻まれる程度なら、そこまでの存在なのだと割り切ることができたからだ。

無論、彼女が生き延びたなら、そのときは他の誰の制止も聞くつもりはなかったが……そのぐらいには、女皇はラエスリールを相対する者として認めていた。

だが――。

事態は女皇の想像を大きく超えた様相を見せた。

帰還した王蜜の妖主が告げる一言一言が、女皇の意識の琴線を震わせる。

破壊の鍵を持ち、五要の闇全てを従えた者。

正規に認められる存在ではない。だが、相手が持つモノ、為した行為は、そのまま自分のそれと重なるのだ。

確かに、と女皇は胸中で呟いた。

認めるしかあるまい。

相手は――ラエスリールは、自分と同じだけの資格と条件を備えた人物だと。
そう……彼女にも確かに権利はあるのだ。
世界の魔性の頂点に君臨する女皇となる権利は。
これだったのか――、あの男が画策していたことは。
膝を折って忠誠を誓っておきながら、平然とこの身にぶつける切り札を作り上げていたのだ……数年前、王蜜の妖主が娘を封じたのは、その企てを阻止するつもりだったのか。
少なくとも最古の妖主は、我が娘をこんな舞台に引きずり出すつもりはなかったということだろう。
だが、そんな彼の意志をもってすら、舞台は整ってしまった。
これは果たして深紅の魔王ひとりの力で可能なことか？　暴れ馬と評したこの世界そのものがなりふり構わずラエスリールという存在をここまで引き上げたのではないのか。
ならば、この世界は創造主に対する叛意を抱いているということだ。

創られた存在が、創り出した存在に背く。
そんなことがあり得るのか。
いや、現実はすでにここにある。
そうである以上、現状を否定したところで何の益にもならないだろう。
おもしろい。
女皇はく、と唇の端を引き上げた。
小さくはない驚愕と衝撃に、胸が震える——動揺ゆえではなく歓喜ゆえに！
自分は世界に唯一無比の存在だと思っていた。
世界は自らの前に膝をつき、ただ頭を垂れるだけのものだと信じていた。
それが自分に用意された席である以上、そうでない何かを求めるのは無意味だとも思っていた。
だが、そうではなかった。
そうではなかった！
第二の君よ、感謝しよう。

決して声に出して告げるつもりはなかったが、女皇は心からそう思った。
対等なる存在などあり得ぬはずのわたしに、戦うに足る理由と相手を用意してくれたのだ、これほどの喜びはない。
そう……。
世界に君臨する玉座（ぎょくざ）はひとつきり——それだけは変わらない真実なのだから！

第四十六章　母と娘（こ）

1

ひたひたと――。

ただ、ひたひたと、足音にならぬ歩みを重ねながら、チェリクは女皇の城の回廊を進む。

純粋なる妖気が物質化したその城は、本来人間が立ち入れる場所ではない。

集う気が違う、具象化したあらゆる全ては、人間が触れてただですむような代物ではない――人間に過ぎぬ身では、到底立ち入ることも存在し続けることさえ不可能な、圧倒的且つ異質な力に満ちた空間を、チェリクは素足で進み続ける。

深紅の魔王の言葉を信じ、その上で策を練った彼女は、確かにひとつの勝利を収めたといえるかもしれない。

虚偽と真実の狭間を常に移ろう魔王の言葉を、信じるべきではないという周囲の声を押しのけたことによって、本来不可能な行為がいま、許されている。

宗流、空也――どうやら、人間の勘というものも馬鹿にはできないようよ。

最後まで付き従うと主張したふたりの黒髪の青年たちを脳裏に浮かべながら、チェリクは小さく笑みをこぼした。

彼らの忠誠は、王蜜の妖主に捧げられており、自分はその縁者という特権を利用して融通を利かせてもらったに過ぎない。

彼らの主の配偶者であるという一事を以て。

まあ、それだけでは全面協力を求める上で不足が生じるのは目に見えていたから、自身の能力は遺憾なく利用させてもらったわけだが。

魅了眼――自ら以外のあらゆる存在を分析解析理解することで、支配を可能とする異能。

一見万能とも思えるこの能力には、実のところ重大な欠点がある。

分析解析までは、この能力を持つ存在には比較的容易い。

問題となるのは、対象への理解と認識だ。
それが大きく深いほど、干渉する力は増大する。
逆に言えば、どれほど客観的に解析できたとしても、理解や認識が追いつかなければ大した戦力とはなり得ないのだ。
チェリク以前に生まれた人間の魅了眼の持ち主たちが、魔性相手に充分な威力を発揮できなかったのは、そこに原因がある。
人間として生まれ、人間としての価値観を固めた目でしか物事を見ることのできなかった先達は、決定的な魔性に対する理解、認識の部分に欠けていたのだ。
それは当然のことだ。
人間にとって、魔性は大きすぎる脅威であり、それは創世の世から普遍の真理として世界に根付いた絶対の感覚だ。
人間としての意識を持つ以上、存在はその枠に囚われる。
是非もない。
人間としての価値観に縛られれば、魔性のそれを理解、認識することは不可能——

とまではいかずとも、相当難しいことになる。
魔性を真実理解しようとした時、違いすぎる価値観が大きな障壁となって立ちはだかるからである。
チェリクは――鬼子と呼ばれた彼女は、そうした意味で、正に特異な存在だった。
人間として生まれながら、血の繋がった両親や親族より、育ての親たる妖鬼を慕った――魔性に育てられた彼女の意識は、人間より魔性に近いものとなった。
そのまま成長していれば、彼女は人間の体に生まれた魔性となっていたかもしれない。
事実、彼女を浮城に引き取ったイズヴァンの懸念はそこにあった。
だが――だからこそ、彼女は魔性を相手取り、最強にして最凶の力を揮う魅縛師となり得たのだ。
彼女は魔性を理解する。
彼女は魔性に共感する。
だからこそ、彼女は魔性の有り様を正確に認識することができるのだ。

浮城の公文書には残っていないとはいえ、浮城の住人で最初に妖貴を葬る奇跡を可能とした力は、そこにこそある。

あの時のイズヴァンの怒りっぷりったらなかったわね。

クスクスと笑いながら、チェリクは当時の養父に等しいひとの様子を思い出す。

本当に、烈火のように怒られたわね。

『こんなことのためにかっ！』

養い児の裏切りとしか呼べぬ暴挙を知った破妖剣士は、裏切られた怒りより、それを事前に見抜けなかった自身への怒りに身を滾らせて叫んだ。

『お前の日々は、こんなことのために積み重ねられたものだったのかっ⁉』

と。

彼の悲しみは伝わってきた。

彼の自分に向ける親の情にも似た想いはそれまでに充分すぎるほどに感じていたし、感謝もしていた。人間の中で、誰を一番信頼しているのかと問われれば、彼だとしか答えようがないほど大切なひとでもあった。

けれど――。

あの時、自分は彼に謝ることができなかった。

悪いことをした、と悔いればこそ、謝罪の念は湧くものだ。

けれど、あの時の自分のなかに、そんなものはなかった。身勝手に定めた仇を討てたその喜びに、悔いなどかけらも覚えなかった。

だから、怒るイズヴァンに答える言葉を持たなかった。

なんと未熟であったことか。

イズヴァンに出会い、マンスラムに引き合わされ、さまざまな経験を通して人間というものを教えられてきたにも拘わらず、自分は心の奥底の解けない凝りに固執して、結局彼らを裏切ることとなったのだ。

本当に、申し訳ない……。

そう、思う。

思う気持ちに嘘はない。

だが一方で、そうであったからこそ出会えた運命にもまた、一片の後悔も覚えてお

らぬ自分を知っている。

イズヴァンが責めた自分の過ち——だが、その果ての出会いを悔いることはチェリクにはできない。

仇敵と定めた妖貴を滅ぼしたその直後、突如姿を現した黄金の化身。

闇か光か、それすら定かでない、圧倒的な力が自身の認識すら吹き飛ばしたあの尊大にしてそれでいて純粋な存在。

怖ろしくて、怖ろしくて——それでも、逃げたくないと思った。

あの出会いは、自分にとって運命だった。

そしてそれは、自分と出会った彼にとっても……同じ衝撃をもたらしたものだと、そう信じたい。

いや、信じている。

だからこそ、彼女はいま、ここにいるのだ。

世界の未来すら支配する女皇の城に、無防備に、裸足のままで。

ひたひた、ひたひた……チェリクは裸足のまま、歩みを進める。

付き従う青年たちを退け、単身で世界の王の城に乗り込んで。
彼女は決着をつけようとしていた。
浮城の理を無視してのけたあの時と同様――。
世界の理が、今現在どのように働いていようとも――。
関係ない、と彼女は断じた。
実の娘ほどの博愛精神に満ちていないという自覚のある、確信犯的にたちの悪い女性は、その人間らしくない精神性を盾に、女皇の城で自由を得ていた。
人間の身には毒でしかない城内を包む空気も、チェリクを蝕むことはできない。
彼女によって解かれた妖気は、逆に彼女を守り、身を隠す紗として彼女を包む。
妖気の結晶すらも、彼女は味方につけることができるのだ。
ひたひた、ひたひた。
歩きながら、チェリクはひとつの確信を抱く。
ああ、やはり――。
城を包む空気は、女皇の存在そのものだ。それは女皇の本質に根ざすものであり、

彼女の気配の根底にあるモノの正体をも露にするものだ。

あの娘――緋陵姫を蝕むあの影は……。

重くなりそうになる足取りを、意志の力で保ちながら、チェリクは小さく息をついた。

決意はすでに胸にある。

だから、その足が止まることはなかった――想定し得る最悪の事態が現実になっただけだと、彼女は自身に言い切った。

※

「……来た」

寝台に半身を起こした黒髪の娘が呟いた。

その姿は抜き身の剣を彷彿とさせるある種の美しさに満ちており、さらにその異相が彼女の存在を際立たせる。

黒髪に、左右色違いの瞳を持つ妖眼の娘。
いまひとり存在する、ほぼ瓜二つの娘とは、似て非なる輝きと影を放つ者。
「姉上？」
その傍らにある青年が、不審げに問いかけるのに、娘――緋陵姫は諦めにも似たため息とともに応えた。
「あれが、来たようだ」
その短い言葉に、青年――乱華の動きが止まった。
驚愕に、衝撃に……信じたくない現実を前に、青年はしかし、緋陵姫の言葉を疑い否定することはない。
彼もまた、この事態を想像していたのだろう――決して実現して欲しくない、最悪の状況として。
それは緋陵姫も同じことだ。
きっと、こうなるのを避けたいと思い、そのために力を尽くしたのは彼らふたりだけではない。

だが――。

「ここに連れてきたということは、父上も認めざるを得ない結果をあれが出したということなんだろうな……」

諦念が宿る彼女の呟きに、しかし乱華は同意しかねる様子だった。

「ラスが、そんな難しいことをわかっているはずがありませんっ！」

激昂しすぎた青年は、いつもは距離を取るもう一人の姉への配慮をも忘れたように怒りの声を上げる。

「昔から、彼女は馬鹿だったし、覚えが悪かったし、できないことのほうが多かった！　そんなラスが、こんな舞台に自分から上るはずがないっ！　全部、全部、あの忌まわしい男が仕立て上げたに違いないんです！」

両者の脳裏に浮かぶのは、深紅の魔王の憎らしいまでに整いすぎた顔だ。

命のほとんどを自ら葬り、その力の源泉たる深紅の双眸のひとつを手放してもなお、強大な気配と存在を世に見せつける怖ろしいまでに力溢れたモノ――。

あの男が、自分たちの大事な大事な――至宝とさえ呼べる存在を絡め取り、身勝手

な未来図に放り込んだ。

彼女を愛する自分たちが、一度として願わぬ未来への道筋を、あの男だけが狡猾に築き上げてきた——彼女の意志すら無視して。

だから、彼女の平穏と幸福をのみ望む自分たちはあの男を憎むしかない。

あの男が仕組んだことは、悉く自分たちの望みからは外れたもので、大切な宝を茨の道へ追いやるばかりのものだ。

認められるはずがない。

「……そうだな」

ふう、と息をつきながら、緋陵姫は乱華に同意した。

賭けてもいい。

自分たちが大切に思う——否、そんな言葉では追いつかないほどに必要不可欠に思う娘は、きっとこんな状況を望んだことなど一度としてなかったに違いないと。

自らの可能性を知らず、その無限の未来を知らず、自らを無能だと信じて生きてきた娘は、一度として自分が世界の命運に関わる存在だなどと思ったことすらないはず

だ。

決してその可能性を彼女に気づかせないよう、幾度も幾度も、彼女の運命を隠す企みは重ねられてきたのだから。

最初にそうしたのは、彼女の実母であるチェリクだ。

生粋の魔性として生まれながら、人魔ふたつの意識を持つ彼女の魔性を封じこめることで、彼女の意識を限定した。

忌み児、鬼子と呼ばれ、人間より魔性に近い感性を持つチェリクだからこそ、その決意を下したのかもしれない。

人間の身に生まれながらも、その異能によって、どこまでも魔性に近い存在となった過去を持つチェリクは、己が産んだ娘の行く末のなか、限りなく実現性の低い、だがあり得ないわけではない可能性を封じるために、ラエスリールにとっては無情とも言える選択をしたのではなかったのだろうか。

人間として、生きる。

そのために不要な力を封じ込めること。

ラエスリールが本来持つ意志と力を封じることで、チェリクは娘を守ろうとしたのかもしれない。

世界の事象のあらゆることを読み解く力を持つ彼女なら、可能であったかもしれないことだ――今日のこの事態を正確に見通すことはできずとも、それに近い未来を視て取り、結果選んだと思えなくもない。

そのために、チェリクは少なからぬ負担を強いられ、リーダイルを産み落とした時点でほぼその力を失った。

そのために、たかが妖鬼程度の襲撃で、命を落とすこととなった。

それを受けて、自分たちの父親である王蜜の妖主は、母の遺志を継ぐことを選んだ。

魔性としても人間としても異端にして異質な存在で在る娘のことを、父が気づかなかったとは思えない――自分たちでさえ、目を背けつつも気づいたことを、あの父が見逃したなどまず考えられない。

そう、可能性として考えられる唯一のことは、父は――母が隠そうとした行為と想いを尊重し、見逃すには怖ろしすぎるさまざまな可能性を秘めた娘を……敢えて黙認

したのだ。

母の願いだったから——というのは、確かにあったろう。

だが——。

父は父なりに、必死に自分に言い聞かせた結果だったのではなかろうか、というのが緋陵姫の見解だ。

当時のラエスリールは正しく無力で、無力で、無力で——考えられる危険な存在となり得る可能性はどこまでも低かった。

これならば、見逃してやれる。

父が本当にそう思ったかどうかはわからない。これはラエスリールの分身たる自分の勝手な憶測かもしれない。単にそうであれば嬉しいという、それだけの感傷かもしれない。

それでも、父はラエスリールを自由にした。

「人間として生きろ」

と告げて、彼女に『人間として』生きる道を与えた。

それを台無しにしたのは、他ならぬ人間の身勝手と――そして、あの深紅の魔王だ。
平凡な人間として生きて死ぬことこそが、ラエスリールに唯一平穏な生を約束することだった。
市井に埋もれ、ただひととして平凡な人生を歩むことを許されたなら、彼女はこの日を迎えることなく、両親が望む生を全うしたに違いない。
それを阻害したのは、彼女の周囲に在った人間の我意。
そして、それを見逃さなかった深紅の魔王の気まぐれ、だ。
彼は、果たしてどの時点から、ラエスリールの持つ特異な資質に気づいていたのか――。
今となっては、計りようもその意味もない。
だが、緋陵姫は思わずにはいられないのだ。
いったいいつの時点から、彼はこの日を狙っていたのかと。
そこにはどんな想いがあったのかと。
彼自身に何らかの想いがあったのか、それとも単に面白いなりゆきに興味をそそら

れただけなのか、否そうではない。

そうでは、ない。

真実と虚偽を絶えず行き来する青年にあっては特異なことに、彼はラエスリールに対しては基本的に誠実である。

何度も彼女を裏切り、その側を離れてなお、彼は彼女に対して誠実であると、誰よりラエスリールに近しい存在で在る緋陵姫が認めざるを得ないほどに。

だが、その誠実さの裏には、それに劣らぬほどの残酷な裏切りが潜んでいる。

かろうじて、過半数を占める誠意と、ただの一雫で裏返しになる叛意。

それは、深紅の魔王の本質に根ざすがゆえに仕方のないことだ。

だが――。

この局面で露となった、ラエスリールの立ち位置について、どう考えるべきか――。

世界の命運を担う、もうひとりの女皇としての資格を用意しながら、彼自身はどうするつもりなのか――どう捉え、動くべきなのかを果たして本当に考えているのか。

わからない。

ここ、この場に至っても、深紅の魔王の思惑が読めない。
それゆえに、緋陵姫も乱華も動けないまま――。
だが、最早そんなことは言っていられない。
ラエスリールは逃げることのできぬ舞台に無理矢理立たされてしまった。
それは、緋陵姫もまた、これ以上逃げられぬ状況に追い詰められたことを意味していた。
わかっていた。
知ってもいた。
いつか必ずこの身に至ると、あの日から覚悟していたことだった。
それでも。
怖い。
心の奥から、そう思う。
怖くて、怖くて、仕方ない。
同時に、これこそが、半身にも拘わらず、ラエスリールの心を理解できなかった元

凶だったのだとも悟った。

そう……翡翠の妖主によって生み出され、かの君の感覚の影響を多大に受けて生まれた緋陵姫は、ラエスリールの命を分けられた分身でありながら、本質的な部分で、彼女とは大きく隔てられた存在だったのだ。

力持たぬ命など、力ある命の前には蜻蛉のそれにも等しいこと。

生まれ落ちた瞬間から力溢れる身であった緋陵姫には、蜻蛉の心がわからない——蜻蛉よりさらに儚いラエスリールの気持ちは尚更に。

だから、彼女のためを思って為したことも、常に瓦解する——ほかならぬラエスリール自身の意志と選択によって。

何が彼女のためとなるのか、今だとて理解できてはいないのかもしれない。

そう思うと、恐ろしさに身が竦む。

決して間違えてはならないこの局面において、自分が道を誤れば、破滅するのは自分だけではすまないのだ。

大切なラエスリールも、愛しい弟も、皆で手を取り破滅へ向かう。

誤ることは許されない。
だが、今のこの身で何ができるのか——だが、為さねばやはり破滅の顎は自分たちを捕らえるだろう。
どう、すれば……。
愛しい者たちを守るためだけに、緋陵姫は方法を模索する。
逃れ得ない己が破滅を確信するからこそ——彼女はそこから愛しい者たちを逃す方法だけを求めていた……。

2

それに気づいたのは、果たして偶然だろうか。
ひたひたと、何かが近づいてくる——気配は感じられない。女皇の城を包む空気は、侵入者を見逃すことはない。
ならば、気のせいという可能性が高い。
だが、緋陵姫の直感は違うと告げていた。
何かが——この胸を騒がせる何かが、確かに近づいて来ている、と。
敵か味方か——否、最早そのようなことはこの身には意味がない。女皇とラエスリールが対峙した以上、敵味方を分ける行為など無意味だ。彼女たちふたりを害する存在でもない限り、緋陵姫にとって敵とはなり得ない。

同時に味方と呼べる者もいない。乱華は例外だが、彼を自分の戦いに巻き込むつもりがない以上、自分はひとりだ。

それはとうに決めていたことだ。だから後悔はない。

ただ――。

近づいてくる……これはいったい何者か。

確かめねばならない。

『敵』である可能性は万が一とはいえ存在するのだから。

「乱華」

臥せって以来、滅多なことでは自分の側から離れようとしなくなった愛しい弟を見上げながら、緋陵姫は告げた。

「広間に向かってくれ」

唐突な頼みに、目映い黄金の青年は訝りに首を傾げた。

「姉上？」

「父上があれを伴って戻られた以上、戦いは必至だろう……その時我らがどう動くの

か、女皇は薄々察しているに違いない。だとしたら、最早普通に広間へ向かうことはできなくなっているだろう……」

女皇とラエスリールが戦うことになれば、女皇は自分たちを戦いの邪魔をする障害物としか見なさないだろう。

自分へ向けてくれる女皇の好意に偽りは感じ取れないから、排除しようとは思わないかもしれないが、干渉させないための手を打つことはいくらでも考えられる。

「……それでも、わたしは行かなければならない。たとえ女皇によって拾い上げられた命でも、この身があれの守護者であることに変わりはないのだから」

だが、と言葉を切り、彼女は弟に頼み込んだ。

「今のわたしの体では、女皇の施した術を破って広間に向かうことは不可能だ。見ての通り、立って歩くのがやっとというありさまだからな」

かつて濫花と呼ばれた青年の肉体に宿る弟は、苛立たしげな光を双眸にたたえたが、制止の声は上げなかった。

女皇の力によって作り上げられた肉体は、その力を失いつつある。女皇自身は知ら

ないが、それは当たり前のことなのだ――冥の海から拾い上げられた魂は、所詮彼女が完全に世界を掌握するまでの間に合わせの配下に過ぎない。

用済みとなれば脆くも崩壊する。

いや、役目の途中であっても、一定の時間が経てば、組織は自壊し始める――女皇が拾い上げた魂のなかで、今残っているのは自分だけだ。体の不調は、その兆しに他ならない。

だが、そのことを弟は勿論、女皇にも告げるつもりはない。

今や完全な存在となった漆黒の少女は、深い孤独を胸に抱えこんでおり、それゆえに自分に執着している。その喪失を、あの少女は許さぬだろう。

最悪の場合、女皇は新たな緋陵姫の器を求めるだろう――その魂を受け入れるに相応しい空の肉体を。

その時、最適な器の存在に、彼女が気づかぬわけがない。

それだけは回避しなければならない。守るべきラエスリールの肉体に宿る自分の姿など、到底許せるものではないのだから。

「乱華、頼む。もしかしたら、今でさえ、もう手遅れかもしれないのだ。この体で何ができるかはわからない。だが、ここに封じられたまま、ふたりの勝負の決着を待つことだけは耐えられない」

想いは同じなのだろう――乱華は不承不承ながら「ええ」と頷いた。

「広間に至る通路を確保すればよろしいのですね？」

「ああ」

頷き返しながら、緋陵姫はひとつだけ釘を刺した。

「だが、間違ってもひとりで飛び込むなよ。お前も、わたしほどではないとはいえ、女皇の束縛を受ける身だ。邪魔だと弾かれるだけならまだしも、あれ相手の質にでもされたら目も当てられないからな」

弟の矜持を傷つける内容であることはわかっていたが、紛れもない事実である以上、口にしないわけにはいかなかった。

この才と力に溢れた弟は、しかしラエスリールが絡んだ途端、冷静さを放り出す悪癖の持ち主なのだから。

自覚はあるのだろう――苦虫を噛みつぶしたような顔になりながらも、乱華は唸るように「わかっています」と答えた。

守るつもりが足かせになるなど、屈辱以外の何物でもない。

「……用意が調い次第、迎えに参ります。ですから、せめてそれまでは静かに横になってらしてください」

そう言い置き、乱華が姿を消すと、緋陵姫は安堵の息をついた。

よかった、彼はこの気配なき気配に気づいていない。

もし気づいていたなら、自分を置いてそばを離れるはずがない――だから、大丈夫だ。

そっと目を伏せながら、緋陵姫は見えぬ相手へ声をかけた。

「見ての通り、この部屋にはわたししかいない。そろそろ不可視の紗を解いてはもらえないだろうか」

答えはない。

代わりに、室内の空間の一部がするりと解けた。

そこから姿を現したのは――。

「あなた、でしたか……」

艶やかな漆黒の髪、明るく澄んだ緑柱石の双眸――上級魔性と名乗っても誰も不思議に思わぬだろう、圧倒的な美貌の女性がそこにいた。

「場所をお間違えのようだ。ラスはここにはおりませんよ。それとも御夫君をお捜しですか、それならば……」

広間に――言いかける言葉は、女性の声に遮られた。

「いいえ」

はっきりと、迷いのない声には決意が宿っている。

「いいえ、緋陵姫。わたしはあなたに会いに来たのよ、わたしのもうひとりの娘であるあなたに――」

あなたを蝕むその……からあなたを解放するために。

告げられた言葉は、緋陵姫が想像もしなかったものだった――。

※

ただひとつの命しか持たぬ守護者として生まれ落ちたことを、緋陵姫は悔いたことはない。

そもそも守るべき本体であるラエスリール自身が、持って生まれた命はふたつに過ぎなかった——守護者を生み出すために割ける命は最大一つ。

ラエスリール自身は、その事実さえ……そう、自らがふたつの命を抱え込んでいる自覚さえなかったが。

その命数はあまりに少なく、また自身を人間と信じていたがゆえに、ラエスリールは自らを輝かせることを知らなかった。

彼女の劣等感、周囲の干渉、意図的に敷かれた錯誤——。

全てが組み合わさった結果、彼女は自らの真実に気づかぬままに時を過ごした。

自身を人間と信じたこともそのひとつだ。

だが、と緋陵姫は思う。

彼女が正確に自身を把握していたとして、事態は何か変わっただろうか、と。

魔性における力のほどは、まずは命数でもって量られることが多い。

真実はそんなところにはないのだが、わかりやすい目安として、当人が抱える命数がその力の目安となる。

魔性にあっては、命数が四に満たなければ最下層の妖鬼か小鬼と見なされる。

妖鬼と小鬼の区分は知能の高さという曖昧なものだ。

四つ以上の命を持って初めて「上位魔性」……すなわち妖貴と見なされる。

その数は世界中を探しても五十に満たない。

ラエスリールが持って生まれた命数は二――それは、小鬼と判断されても仕方のないものだった。

だが、彼女はその事実を知らない。

半人半妖の身に生まれた「人間」なのだと自らを信じ、それゆえに生まれて間もなくチェリクに封じられた「朱烙」の意識を、ひとつの命しか持たぬ自らのなかでせめぎ合う存在なのだと認識した。

実のところ、それは誤解だ。
自ら生み出した不完全な意識でない限り、意識と命は固く結びあっているもの……
ふたつの命を持つ彼女に、ふたつの――人間と魔性の意識が存在するのは当然のことだった。
だが、彼女はそれを知らなかった。
自らを人間と信じるがゆえに、費やせる命がひとつあることを知らなかった。
持てる命をひとつと信じるがゆえに、朱烙の存在に苦しんだ。
だが、その誤解と苦しみが、彼女をより高みに押し上げたのは皮肉なことだった。
ラエスリールは自身を人間と信じた。
それゆえに、ただひとつと信じる命に、どこまでも執着した。
致命的な傷を受けた時でさえ、自らの命をひとつと信じるがゆえに、「死ねない！」との一念で命脈を繋げた。
こんな所では死ねない！
と。

ただ、その一念のみで。

その記憶を浚うとき、緋陵姫は感動するより感心するより先に呆れた。

自分の主は馬鹿なのか。

いや、そこで早々に諦める程度の精神力の主であれば、自分を生み出す命数はすでに尽きていたわけで、そうなれば自分が生まれることもなかったわけだから、主が非常に頑固且つ生に貪欲であったことは歓迎すべき美質だと思い返しはしたものの、やはり何度振り返っても、主の言動は愚かしいと思いたくなることが圧倒的に多かった。

その元凶はどこにあるのか、緋陵姫はずっと知りたいと思っていた。

無論、ラエスリールの母であるチェリクはすでに鬼籍のひとであり、父である王蜜の妖主に対して乱華が為した暴虐がある以上、問いただす機会などありはしないとわかってはいたが。

だが、いったいどうすれば、弟たる乱華とあれほどに違う、元は同じ命を分け合っていたとは思えぬあんな滅茶苦茶な存在が成立するのか。

誰かに問えるものなら問いたいものだと、常々思っていたのは確かだ。

その希求は、自覚している以上に大きなものだったらしい。
いまは、そんな状況ではない――この非常事態にあって、そんな些末事にかかずらっている場合ではない。
理性ははっきりとそう告げてくるのに、どうしてもその件について問いただしたい。
強烈な欲求が、緋陵姫の心を圧倒する。
無理もないではないか。
ここには、自分とチェリクふたりきりなのだ。
反応を気にすべき乱華も遠ざけた。
何を言うも、何を聞くも自由だ。
ならば、聞かねば損というものだ。
ある意味、緋陵姫らしからぬ、こんな想いに駆られたのには理由がある。
この女皇が支配する世界でも最難関であろう場所に気配もなく忍び込んできた恐るべき女性は、よりにもよって、緊張の糸が切れんばかりの空間で。
淋しげな拗ねた目をして、緋陵姫に――こう声をかけてきたのだ。

「ねえ、緋陵姫、どうしてあなたは、そんなに他人行儀なの？　リーダイルのことは、ちゃんと弟として扱っているようなのに、どうして……」

実に実に悲しげな声で、

「わたしのことは、あなた、なの？　お母さんとか母さまとか母上とか、呼んではくれないのかしら？」

などという馬鹿らしすぎる問いを投げかけてきたのだ！

この緊迫した状況で！

存在が女皇に知れれば、その瞬間に殺されてもおかしくないこの場所で！

ラスの記憶の中にあるチェリクと、実際の彼女がまるで違うということは、かつて相まみえた時から知っていた。

乱華の意識が表に浮かんでいるにも拘わらず、彼女は奥に在る緋陵姫の存在をしっかりと見抜いていた。怖ろしい眼力は、そのまま力の行使の可能性を告げていた。

怖ろしい女性だと、そう思っては、いた。

だが――！

「どうして、この状況でそんな言葉が出てくるんです！　あなたは何を考えてらっしゃるんですか!?」

叫ぶように問い返しながら、緋陵姫はどこかで納得するものを感じていた。

空気を読めない――いや、読むつもりがない恐ろしくマイペースなこの性格は、形は違うがラスにも通じている。

融通が利かない頑固さと言い直してもいい。

こうと決めたが最後、どれほどこちらが「やめてくれ」と懇願しても、決して譲ってはくれない強固な意志。

チェリクのほうが、娘よりは柔軟にできているように見えるが、根底の部分ではきっとそっくりなのに違いない。

「……どうして、あれを……ラスを、あんな風に育てたのです！　逃げるべき時すら逃げない、ぶつかるべきでない時に身を屈めることさえしない！　あれではただの死にたがりと同じではありませんか！　それを望まぬ周囲の声に耳を傾けようともしない！」

そんな彼女を見ているこちらの身にもなってほしい。

どれほど守ろうとしても、ラエスリールは危険に飛び込んでいく。

懇願しても脅しても――支配してさえ、彼女はその頑強な意志ひとつで、自らの望みのまま駆けていくのだ。

彼女を愛する者たちにとって、それがどれほど残酷な行為であるのか、考えもせずに！

どうして、そんな彼女にしてしまったのか――元凶は、やはり目の前の女性であるとしか、緋陵姫には考えられなかった。

「どうして……」

「緋陵姫……それは違うわ」

自らを非難する娘の守護者に、間違って人間に生まれたとしか思えぬ女性は、淡々とした声で答えた。

「以前も、似たようなことを問いかけられたことがあるけれど……答えは同じよ。わたしがあの子を導いたのではないわ。あの子は自らの生きる道を岐路に立つ度、自分

で選び取ってきた……あなたの目には、破滅の道を突き進んでいるようにしか見えないのかもしれない。もしくは狡猾な傀儡師の掌で踊らされているようにしか……」

可能性の話ではない。

それは正しく、今現在ラエスリールが置かれている状況だ。

自らの本心すら把握できぬ深紅の魔王の掌で、破滅への綱渡りを余儀なくされている。

「……他に、どう言えば良いというのです」

ラエスリールが望んだことではない——他者が整えた舞台に無理矢理押し出された状況を、他に何と言えばいい。

「そうね、あなたにはそう見えるのでしょうね。でも、わたしには違って見えるの。わたしは……あの子が知らずにこの舞台を調えたように見える。他者の干渉など決して受け付けない、不屈にして最強にして最凶の存在さえも巻き込んで」

「あり得ない！」

反射的に緋陵姫は叫んでいた。

「あの男を操る!?　動かす!?　あり得ない！　そんなことは父上でさえ不可能です！」

言ってしまって、はっとする。

王蜜の妖主を思わず「父上」と呼んだことで、先ほどのチェリクの不満を再度呼び起こすことにならないかと懸念したのだ。

はたして――。

深刻なことこの上ない話題が展開中だというのに、チェリクの双眸に拗ねたような光が宿った。

「やっぱり、酷いわ。リーダイルだけでなくあのひとのことまで家族と認めているのに、わたしだけ蚊帳の外だなんて……」

「これ以上はないという重大な話の中に、どうでもいい茶々を入れるのはやめてください！　あれが……ラスが、世界の命運を担う女皇の座など望むはずがないではありませんか！　なのに無理矢理その座を巡る戦いに巻き込まれている！　望みもしない戦いの舞台を、どうしてあれが調えるなどと思うのですか！」

あり得ない――！

固くそう信じる緋陵姫の耳に、信じがたい答えが返る。

「望んでいるからよ」

はっきりと、きっぱりと、迷いのない声が、緋陵姫の耳を打った。

「自覚があろうがなかろうが、あの子は女皇の導くものではない世界を望んでいる。わたしこそが言いたいわ。いつまでも、あの子を無力で庇護が必要なか弱い子供扱いをするつもりなのかしら？　あのひとも、あの子もあなたも……それはすでに、あの子にとって足かせとしかならない行為を押しつけているのだと、いい加減気づいてもらいたいものだわ。まあ……あの人は、渋々ながらも認めてくれたみたいだけれど……」

そう言って、チェリクは息をつく。

それは小さな、本当に小さなため息――だが、伏せた瞼が再び開かれた時、その奥に現れた揺るぎない決意の光に、緋陵姫は知らず身を引きかけた。

「……では、あなたは、最早あなたの娘の足手まといにしかならなくなった障害を取

り除くためにここにいらした……と？」

納得はいかない。

自分が理解できぬ領域で繰り広げられる状況の変化を、緋陵姫が呑み込むことはできない。

だが、その道筋を示されたことは紛れもない真実で、それについていけない者は置き去りにされても仕方ないのだと宣言されたようなもの。

自分にはわからない。

だが、直に話してわかったこともある。

チェリクとラエスリールは、自分にはわからない部分で大きな共感領域を共有しており、それを持たぬ自分は排除すべき要因だと見なされたのだと。

要は、自分は守護者として失格だということだ。

守るべき相手に、守らせるに充分という資格を認めてもらえなかった。

緋陵姫は笑った——諦念とともに。

朽ちゆくこの身に、この審判は相応しいのかもしれない——そう思えば、全てを受

け入れるしかないような気にもなる。

だが――。

対峙する女性は、そんな彼女の弱気を吹き飛ばす怒りに満ちた声を上げた。

「馬鹿を言わないで！　何を聞いてるの、何を聞いていたの！　わたしはあなたに会いにきたのだと言ったでしょう！　……あなたを、解放するために」

激烈な声は真実に溢れていた。

真実、チェリクは緋陵姫のために――緋陵姫を解放するためだけに、この場を訪れたのだと疑う余地もないほどに。

だが、それは……。

現在の緋陵姫の命を摘み取る行為でもある。

女皇の支配下に置かれたがゆえに、緋陵姫を蝕む絶対の力と枷――そこから彼女を解放するということは、代わりに緋陵姫の命を摘み取ることさえ厭わぬ覚悟なしでは為し得ない。

そこに至って、緋陵姫はチェリクが用意した舞台に、自分が上がらせられたことを

ようやく自覚した。

そして、そこで問われる覚悟を。

「選べ、と……？」

戦うか、戦わずに膝を折るか、戦った後に屈服するか。

だが、そこにどんな意味があるというのか。

「いいえ」

そして、現れた運命は、どこまでも彼女に優しくない選択を強いる。

「考えてちょうだい。今まで考えたことがないのなら、初めてでも考えて。ラエスリールのためでなく、リーダイルのためでなく、緋陵姫、あなた自身のために。あなたはどうしたいのか、あなたはこのままでいいのか……仕方ないと諦めるのか、足掻いてでも先に進みたいと思うのか……この戦いの中で」

選んでちょうだい。

告げると同時に、強大な圧力が緋陵姫に襲いかかってきた。

それは、彼女の根底に施された女皇の呪縛を解く力――であると同時に、彼女の命

そのものをほどき、無力化する力だった――！

3

ラエスリールには、父の言葉が理解できなかった。

原初の闇が支配する空間から連れ出された時、彼女は父が自分を認めてくれたことを素直に喜んでいた。

未来は変わらないかもしれない。

父は女皇に忠誠を誓う者として、元の世界に帰還したところで、敵対関係は変わらないかもしれない——いや、彼の性格なら、確実に女皇に従うだろう、己が心に定めたことを、容易く揺るがすひとではない。

それは、彼との戦いのなかで痛感したではないか。

だから……そう、彼が優しさを垣間見せてくれた時間は、あの彼が支配する場所だ

けのものであり、元の世界にあっては、自分たちは敵同士のまま……あるいは、再び刃を交わさなければならなくなるかもしれない。

悲しくないわけではない。

どうして父と戦いたいはずがあるだろう。

だが、それでも父との戦いのなかで、心に刻んだ覚悟は大きい。

女皇から、未来を奪い返さなければ。

人間を不要と断じるあの少女に未来を委ねてはならない——戦いに身を投じてでも、必ず為さねばならないことだ。

父は、その覚悟を、決意をこそ認めてくれたのだ。

なればこそ、原初の世界から、彼女を連れ出してくれた。信じる道を進めと、背を押してくれたのだ。

それだけで充分だ、とラエスリールは思う。

敵対する現実からも、これから待つ絶望的な戦いからも、もう逃げない。

選んだのは人間もいる世界、だ。

魔性だけの世界でなく、人間だけの世界でなく、いま在るままの……いや、もう少しは人間に優しいほうが望ましいが……そんな世界だ。

魔性も人間も、双方が生きるひとつの世界――その未来をこそ、自分は望む。

傷は癒えた。紅蓮姫も回復した。戦うための準備は整った。

ならば、あとは足を踏み出すだけだ。

そう思い、父に連れられ、この女皇の城を訪れた。

漆黒の絡みつくような闇が結晶化した城内の空気に、喉を締めつけられるような圧迫感を覚えたが、そこで怯みはしなかった。

ただ、わかっていた事実を再認識しただけだ。

女皇は強い――その力は計り知れない、と。

そこにいたのは女皇だけではなかった。ふたつとも、知った顔だ。

白焔の妖主は変わらず誇り高き炎のような気を放っていたが、それでも女皇のそれには及ばない。

もうひとつの顔からは、視認してすぐに目を逸らした。目にしただけで、この場に

相応しからぬぶすぶすと燻る怒りが再燃しそうだったからだ。

驚いた様子ひとつ見せていないのが、また腹立たしい。先日、チェリクの内から見た時のように、女皇に寄り添って立っているわけではないが、それでも距離は近い。

奪い返す、と心に決めたのは確かだが、後回しにするとも決めた。

あの男に意識が向かうと、到底冷静ではいられないから、我ながら正しい判断だと思う——だが、だからこそ、無視してもイヤでも感じ取れる深紅の闇の気配が憎らしい。

本当に、イヤな男だ。冷静さを失って勝てるはずのない戦いを前にして、それを容易く崩してくる。

いっそ、どこかに消えてくれないだろうか……儚い希望は、しかし儚いままだった。

そんなことを思っていたラエスリールの意識を現実に引き戻したのは、原初世界における殊勝な態度を綺麗に忘れた様子の紅蓮姫の反応だった。

極上がこんなにっ！

美味な食事への期待に震える真紅の破妖刀に、恋する可憐な少女の面影はない。

まったく、とラエスリールは胸中で息をついた――どいつもこいつも、戦いを前にしたわたしを少しぐらい気遣おうという優しさはないのか、と。

ぼやいたところで実現性は限りなく低いこともわかっていたので、結局声に出すことはなかったが。

しかし――。

彼女を誰より驚倒させたのは、父である王蜜の妖主だった。

漆黒の少女の前に跪き、口上を述べた父は最後にこう告げたのだ。

『……認めざるを得ません。これは、あなたと等しく新たな世界の女皇たる資格を持つ者だ、と』

何を言われたのか、ラエスリールには理解できなかった――。

※

言葉の意味がわからない。

父がいったい何を言っているのか、皆目見当がつかない。
呆然と……ひたすらに呆然として、ラエスリールは父の言葉を反芻した。
『これなる我が娘は、破壊の鍵を持つ身にして』
破壊の鍵とは、世界を支える五要たる妖主を倒した者の命に発生する力だったと記憶している。
それならば……確かに、思い当たる節がある。
紫紺の妖主を倒したアーゼンターラの命が『破壊の鍵』を宿したのなら、翡翠の妖主を倒した自分のそれにも同じモノが宿っていてもおかしくはない。
『五要の闇全てを従えました』
……それはもしかして、父が創った世界に在った五色の闇たちのことだろうか？
確かに従えたと言えなくはないが……だが、あれはこちらの世界に連れて来てやるから従えという、期間限定のいわば契約のようなものではなかったろうか。
あれをして『従えた』というのは、どうにも得心がいかない。
第一、その先が問題だ。

破壊の鍵を持って、五要の闇を従えた、から……？　新たな世界の女皇たる資格を持つ、とは……何のことなのか、全然理解できない。

そう思ったのは、何もラエスリールひとりではなかったらしい。

広間に控えていた白焔の妖主が、険しい声を上げた。

「お待ちを、王蛮の君！　それは道理が通りませぬ！　確かに娘御は翡翠のを倒した時点で破壊の鍵を抱えたことは認めましょう！　ですが、五要の闇全てを従えたとは、到底得心できることではございませぬ。王蛮の君が領域に、妾たちとなる以前の闇が取り残されていることは承知しておりますが、それらと妾たちはすでに別のモノ……かような闇たちの服従を、女皇の資格と認めるわけにはまいりませぬ！」

それはそうだ、と糾弾されているラエスリール自身が、一番に思った。

白焔の妖主でなくとも、到底認められる言葉ではないはずだ――父は何を思い、こんな奇論を持ち出したというのか。

しかしその時、新たな声が割り込んできた――いや、視界に入れないようにしていたとはいえ、この場にいることは知っていたのだから、驚くには当たらないかもしれ

ないが。

「いいや、白煉……そいつは違う。お前は考え違いをしてるぞ。そいつが言っていることは、そういうことじゃない」

「柘榴の！　くだらぬ茶々を入れて良い場合か、少しは考えよ！」

黙っておれ！

燃えさかる炎そのもののような気迫に満ちた一喝に、しかし深紅の青年は動じない。

「くだらなくなんぞない。お前だって、少しばかり思い出せば、そいつの言い分が至極まっとうだということがわかるはずだぞ」

その言葉に、白焔の妖主が考えこむ顔になった。

しかし、ラエスリールは何もわからぬままだ。大体、なぜ闇主が父に同意するようなことを言い出したのか……今度は何を企んでいるのかと、警戒心が膨らむぐらいだ。

場の混乱を狙っているのか？

だが、見たところ女皇は平然としている……逆に混乱しているのはわたしと白焔の君ぐらいで……もしかして、それこそが狙いなのか？

しかし、もしそうなら、白焔の妖主まで巻き込む必要はないはずだ。
ラエスリールの混乱は深まるばかりだ——そんな彼女を、深紅の男が一瞥する。
面白くてたまらないとでも言いたげな光が、その瞳に浮かんだのを彼女は見逃さなかった。
この男はっっ！
懸命に平静を保とうと努力している自分に、この男ときたら何ということをするのだ！
殴る！
固く、固く、ラエスリールは心に決めた。
絶対に一発、こいつだけは殴ってやる！　いや、一発では到底足りない。拳がつぶれても構わないから、こいつの笑みが消える程度には、絶対に！
そんな物騒な決意が彼女の心に生まれたことを知ってか知らずか、男は飄々とした態度を崩さぬままにこう続けた。
「……その者は、最後に無力に生まれたモノ。五要を従え、その力を揮うモノ。やが

ては破壊の鍵を手に、世界の行く末を決するモノ――これが、創造主とやらがおれたちに知らせた女皇の条件だ。もっと詳しく教えといてくれりゃあ、こんなことにはならなかったかもしれないんだが……仕方ない。確かにそいつは、全ての条件を備えてる」

真面目とはお世辞にも言えない青年の態度に、白焔の妖主が怒りに肩を震わせる。

「馬鹿を言うでない！　この娘のどこが、条件を備えているなどと……！　妾となる前の脆弱な闇が従ったからといって、それを妾の服従と見なされるのは我慢できぬ！」

ラエスリールの耳には、白焔の妖主の主張はもっともなものに聞こえた。

だが、深紅の魔王の見解は違った――恐ろしく厳しい眼差しを、年下の眷属に向けるなり、冷ややかな声を上げたのだ。

「馬鹿を言っているのはお前のほうだ、白煉。お前は真実、こいつに屈したことがないと言うつもりなのか？　こいつの力を前に、一度でも膝を屈したことがないとでも？」

その声に、白焔の妖主が息を呑んだ。

「お前だけじゃない。藍絲だって、翡翠だってそうだ。こいつに命を散らされた時点で、従わされたんだ。五要が命を落とすということは、そういうことだ」

男の言葉は、ラエスリールにとっては依然として実感が湧かぬ遠いものだった。

それなのに、男が言葉を重ねる度に、胸の奥底に重い何かがずしりと積もっていく。聞きたくない、知りたくない——その怯えを、不安を、しかし男は許さない。

「金の野郎が認めたってことも、同じだろうよ。頑固で融通の利かない男が認めるんだ、娘可愛さなんぞで動く男じゃない。動きたくても動けないというほうが正しいかもしれないがね」

暴かれる——秘められた世界で繰り広げられた戦いとその顛末。

父たる妖主の心臓を、娘である自分が貫いたというその事実を、男は隠されたままにしておいてはくれなかった。

「だが！　だが、そういうことなら、お前はどうなるのだ!?　裏切りの性を持ち、これまで数えきれぬ誓約を結び、同じ数だけ反故にしてきたお前は!?　お前の立てた誓

いなど、塵芥ほどの価値もなきものなれど、それすらその娘は捧げられておらぬではないか！」

闇主……。

白焔の妖主の叩きつけるような舌鋒に、向けられた男よりラエスリールのほうがダメージを受けた。

言われるまでもないことと、なるべく思うようにはしていたのだが、やはり第三者による指摘は大きい。

嘘つきだ、信用ならないと、自分の経験から彼に対する非難には事欠かないと思っていたが、それが、まさか彼の知己にまで共通した認識だったとは。

ラエスリールは悲しくなった。

彼の自分へ向ける感情が気まぐれ以外の何物でもなかったのだと知らされたこと以上に、誰よりも近しい同胞からもそうとしか見なされない彼の在りようというものが、どうしようもなく悲しく感じられたのだ。

だが、そんな同胞からの理解を伴う攻撃さえも、彼には打撃とはなり得なかったら

しい。

それはとても悲しいことだと、そう思うラエスリールの心中を知ってか知らずか——。

男は……場違いにもほどがある、勝ち誇った笑みで応じたのだ。

「おれ？　おれが、こいつに……ラスに膝を屈していないだと？　それこそ、とんでもない思い違いというやつだよ、白煉。おれは確かに何度もラスを欺いたし、裏切りもしたし、その死を願ったことさえある。当たり前だろう、お前の言うように、何ものにも縛られない、自由を満喫するおれにとって、おれを呪縛する存在以上に厭わしいものはない。騙して誤魔化して油断させてでもおれの目の前から消えてもらいたいと思わないわけがあるか？」

なんだろう……なんだろう。

もしかしたら、とても重要なことを言われているような気がする一方、とてつもなく酷いことを言われているような気がするのは……どういうことなのか。

「手なずけて、一通り遊んで飽きたら死地に送り込んで処分して終いにするつもりだ

ったってのに、思うようにいかないったらない。まったく、お前にも同じ思いを味わわせてやりたいぐらいだよ」

いや……大事なことより、酷い内容のほうが多い。

絶対に多い。

あまりに酷い言いように、ラエスリールは泣きたくなった。

これが、闇主の本心――出会って以来、ずっと隠し持っていた本音なのか。

それは容易くラエスリールの心をずたずたに切り裂く。

だから――だから、お前なんて大嫌いなんだ！　勝手にそばに来て、居着いて、いつの間にかそばにいるのが当たり前で、いないのがおかしいだなんてこちらに思わせておいて……なのに、お前自身は離れることなんて全然平気で……本音では「死ねばいい」なんて酷いことを考えていて……なのに、なのに、それを知っても自分は……っ！

知らず、握りしめた拳が震えていた。

何を聞いても落ち着いていられる――何があろうと平静を保つ。

そう決めていたから、この城を訪れる前から、閉じたままにしていた拳が。
それでも堪えきれぬ震えに支配された……血の気を失い、白くなったその拳に。
乱暴に熱を重ねられたのは次の瞬間だった。
なに、と思ってそちらに目を向けたラエスリールは、暴言魔王と勝手に名付けた深紅の青年の姿を認め、思わず目を瞠った。
状況が、理解できない。
なぜ、この男がこんなにもすぐ側にいるのか。それも、自分の前で……まるで跪くかのように……いや、確かに膝をついて……しかも、いかにも大切そうに自分の両手を包み込むようにしているのは、今度は何の企みなのか。
「なにを……」
声が上ずる——油断すると、鼻声になりそうだ。
そんな彼女に、深紅の男は——ひどい言葉ばかり羅列して、彼女の心を切り裂いてきた男は、「本筋聞く前に、勝手に泣くなよ」と、それこそ勝手なことを言い出した。
そして、男はラエスリールの両手を重ねる格好に掲げ持つと、その手の甲に口づけ

た。

「我が女皇……我を我が本質たる真名ごと塗り替え、己ひとりのものとした絶対にして恐ろしき支配者よ。迷いと恐れの旅路の果てに、我は……いいや、誓願の決まり文句より、おれ自身の言葉のほうが届きそうだな。ラス。気まぐれにお前を訪ねた夜にお前は、おれを『闇の王』だと告げて、千の禍たる真名から解放し、新たなる名でおれを縛った。あの夜からおれは自由を失った。失った自由を取り戻すために、おれも相当足掻いたが……いい加減、諦めた。おれはお前のものだと認める。だから、お前も諦めろ……おれの主、おれがいる世界の女皇はお前だけだ。このおれに、そうと思わせただけの成果を上げろ」

創造主とやらが勝手に用意した女に負けるな。

出会ったときから身勝手だった男の要求は、どこまでいっても身勝手なものだった。

その要求を聞くつもりはない。

男が勝手に望むなら、自分も勝手に未来を描く。

望む未来に齟齬が生じれば、互いに話し合うなり戦い合うなりすればいいことだ。

そうやって、すり合わせたり話し合ったりして、魔性と人間の距離を縮めていけたら……どんなにか良いだろう。

だが、それは先のことだ。

目の前に最大の障害が立ちふさがっている。

その障害は大きい。

とてつもなく大きい。

だが、それでも――。

取り戻すと思い決めた男は、実のところは、常に自分の側にいた。

それだけで、ラエスリールは力が湧いてくると思った。

第四十七章　摑みとるもの

1

肉体が、意識が解かれていく……。

不思議な感覚に緋陵姫は戸惑いを覚えた——恐ろしいと、なぜか思わない。

それはチェリクの放つ力が、圧倒的でありながらも、優しさをたたえているからかもしれない……そう、破滅ではなく救いを緋陵姫に与えようとしているのがわかるのだ。

ラスの記憶の中にあった優しい手——同じ温もりを確かに感じる。

ああ、このひとは、本当にわたしをもうひとりの娘だと思っているのだ。

娘の守護者として生み出された存在ではなく——そして、母として崩壊を待つばかりの我が子の魂を守るために、敢えて存在そのものを解こうとしている……。

いくら衣服で隠そうとも、チェリクの目には、自分の肉体の状態など一目瞭然なのだろう……今すぐ崩れてもおかしくないほどに損傷の進んだこの体を、残したくないという望みすら、彼女は叶えてくれようとしている。

欠片も残さず、綺麗に解いて……そうすれば、戻ってきた乱華は真実を知らずにすむ。チェリクによって命を解かれたことを、ではない。彼が望む回復など到底かなわぬ状況に自分があったという、その事実を。

姿を消した自分を、乱華は捜すだろうか。

捜すだろう、と素直に信じられる。肉親の情に篤い彼のことだ、世界の果てまで自分を捜しに出かけるだろう。

愛しい弟――心からそう思う。

ラエスリールと乱華と三人で、姉弟として過ごせたら、それはどれほど幸福な日々であったことだろう。

世界の存亡など関係のない場所で、三人で笑い、時に意見をぶつからせて――そんな風に他愛のない日々を積み重ねることができたなら。

だが、それは最早かなわぬ夢だ。いや、あり得ぬからこそ夢にみたのかもしれない。ラエスリールが道を違えたからではなく、彼女が前を向いたからこそ、微睡みのような日々は夢に変わった。

閉じられた世界ではなく、残酷な外の世界を真っ直ぐに見つめることを、ラエスリールは選んだのだ。

痛みを伴う現実を生きることこそを、彼女は選んだ。

最初から、夢は夢でしかなかったのだ……自分と乱華は、そのことから目を逸らし、必死に夢の欠片を繋げようとしていただけなのだ。ラエスリールのためと言いながら、実際は自分たちの望む世界を求めていただけだった。

乱華も、本当はわかっている——外界から隔絶された繭のような世界に閉じこもることは、生きているとは呼べないことを。ただ、夢はあまりにも甘美で、抗いたくないと思ってしまうだけだ。

それでも、もう……。

夢すら紡げなくなったことを、いつあの弟は知るだろう。

その時彼はどうするのだろう。
これまで同様、頑なに現実から目を背け、あり得ぬ夢を追い求めつづけるのだろうか。それとも不可能を認め、打ちのめされてしまうのだろうか。
女皇の枷に自ら繋がれることさえ承知の上で、自分を守るために仮初めの肉体に宿ったあの弟は、その後どうなってしまうのか。
生前、この命を永らえさせるために、罪にまで手を染めたあの弟は……。
そこまで考えた時、緋陵姫は失念していた重大な事実に思い当たった。
かつて、自分と乱華が犯した重罪――父たるひとを背後から襲い、その力の源である心臓を奪い、啜った。
世界の王への許されぬ反逆行為。
正確には父を襲ったのは乱華であり、自分がそれを知ったのは瀕死の傷を負った際、力の雫を注ぎこまれた時だった。
だが、そんなことは問題ではない。
あの時、自分はそれが大罪の蜜と知りつつ、受け入れたのだから。そうして弟の罪

を分かち合うことで、少しでも彼の負担が減ればいいと願ったのだから。

長い、長いこと、その罪は明らかにされることはなかった。

その多くの命を宿した乱華の肉体で目覚めた父は、強大な幻術を以て、配下にも決してその事実を気取らせなかった。

見抜かれる可能性が高い同輩たちの前には姿を現さなかった。

それゆえに、自分たちの罪が他者の目に触れることはなかったのだ。

だが――。

ついに父はその姿を現した――ラエスリールが気づいたように、他の妖主たちも父の現在の真の姿を知っただろう。そして……彼らは悟ったに違いない、自分と乱華が犯した罪に。

彼らの態度に大きな変化はなかった――彼らにとっては所詮他人事であり、どうでもよいからなのか、あるいはそんなことは彼らにとっては大したことではないのか――魔性の王ならざる身には判断できない。

だが、自分たちの罪を気にする存在は、確実に存在する。

他でもない、王蜜の妖主を唯一の主と信じて従う配下たちにとって、それは決して許されざる罪だ――ラエスリールの仕業だと誤解した妖貴たちの執拗な追跡は、父の新たな命がなければ、今でも続いていただろう。

それが、実は乱華によるものだと、彼らが知ってしまったならば――？

上位魔性である妖貴は皆矜持が高い。

それゆえに、欺かれることを何より嫌う。自分たちが乱華に騙されていたと知った時、彼らの怒りは真っ直ぐに弟に向けられる。

恐ろしい。

今の乱華は、かつての力溢れる存在ではないというのに。女皇の枷をつけられた器では、魅了眼を放つこともできない。強大な力は健在でも、仮初めに過ぎぬ器に宿っていては本来の力を発揮することは難しい。

そんな状況の彼に、配下の妖貴たちがいっせいに牙を剝いたとしたら……。

不吉な予感に、壊れかけた体が芯から凍りつく。

父を崇拝する配下たちは、表面はどうあれ、決して自分たちを許すまい――自分は

いい。だが父の現在の姿ゆえに、彼らの憎しみは乱華に集中するだろう。
王に手をかけた罪、その力を奪った罪。
彼らにとって、決して看過できぬ大罪ゆえに、彼らの怒りは持てる以上の力を伴い、乱華に襲いかかるかもしれない。
そんな危険のなかに、乱華を置いて逝く……？
先ほどまでの自分の思考の愚かさに、緋陵姫は愕然とした。
できるわけがない。
そんなことができるはずがない！
そうと悟った瞬間、緋陵姫は解けかけ、宙に溶けこもうとしている「自分」の欠片に必死に手を伸ばした。
死ねない——死なない。
力を求めて罪に手を染めた弟は、確かに愚かだ。
それは否定しない。
だが——それが何だというのだ。愚かさを持ち合わせぬ者など、この世界に果たし

て存在し得るのか。ひとかけらの罪さえ犯したことのない者が、本当にいるのか。
否。
いたとしても、それが父の配下であることは決してない。ならば――！
「逝けない……このまま、何も告げず、何も伝えぬままには！」
何を自分は逃げようとしていたのか――崩壊を待つばかりの肉体が何だというのだ。
勿論、知れば乱華は嘆くだろう。
避け得ぬ別離に運命を恨むかもしれない。
だが、それでも――永遠に真実を求めて世界中を彷徨い歩くよりはましではないか。
なぜ、そんな簡単なことさえわからなかったのか。
真っ直ぐに、自分を解く緑柱石の眼差しに向き合う。
「あなたは考えろとおっしゃった」
「ええ」
緋陵姫の存在を分解する力を放ちながら、そのひとの声は穏やかだった。
「ラエスリールのためでなく、乱華のためでもなく、わたし自身の望みは何なのか、

と」

「ええ」

「それはあり得ないことです。ラエスリールと乱華はわたしが持つただふたつきりの宝なのです。彼らと自分を切り離して考えることなど、最初からあり得ないのです。それはわたしが守護者として生まれたせいかもしれない」

淡々とそう告げる緋陵姫に、チェリクが悲しげな目を向けてくる。

「緋陵姫……」

「ですが、それがわたしです。ラエスリールの守護者として生を受けた事実を含めたそのすべてがわたしを作り上げているのです」

だから、ふたりと切り離せない自分が自分ではないとは思わない。

「ラエスリールと乱華をこのままにして、ひとり先に逝くわけにはいかない……これはわたし自身が選んだことです。あなたはこうもおっしゃった……いつまでラエスリールをか弱く庇護が必要な子供扱いするつもりかと。わたしはあなたに問いたい……今、あなたがやってらっしゃることと、わたしたちがやろうとしたことのどこが違う

のか、と！」

変わらない――緋陵姫はそう感じる。

「哀れな最期を迎えようとするわたしを解放するというのは、あなたの独善でないと言い切れますか⁉　あなたの好意は疑いません……ですが、あなたが善かれと信じることを、わたしが無条件に受け入れる理由はない！」

不可視の糸に連なって、宙に溶け込もうとする光の欠片――緋陵姫自身。

それらを必死にたぐり寄せながら、彼女はチェリクに宣言した。

「わたしは、あなたによる解放を拒絶する！　あなたにわたしを委ねたりしない！　わたしの命も存在も、最期までわたしのものです！」

高らかに、誇らかに、緋陵姫は言い切った。

そうだ、破滅しか待たぬ未来とわかっているから何だというのだ。

この身は破滅しようと、周囲がそうとは限らない。自分が最期の瞬間を迎えるまでに、何かを為すことはできるはずだ。

瀕死の傷を負ったとしても、野生の獣は諦めたりしない。

懸命に必死に、命が潰えるその刹那まで、ただ生きる。
足掻くことが無様だなどと、いったい誰が言うのか。綺麗な死に様に、満足するのは自身か周囲か。
安らかに死を受け入れられるのは、真実やりたいこと、やるべきことを全て為した者だけではないのか。
自分は違う。
まだ、やり残したことがある。まだやらねばならぬことがある！
そうである以上、チェリクの優しい解放の力に、この身を委ねることはできない！
「わたしは……っっ！」
死なない！
決意を込めた覚悟の言葉に、緋陵姫は自分を包む力がその動きを止めたことに気づいた。
否応なしに緋陵姫の存在を解き続けていた力が、弱まったのではなく消えたのだ。
それはチェリクの魅了眼の発動が止んだことを意味する――。

なぜ？

目を瞠った緋陵姫の前で、緑柱石の双眸の女性が、ふわりと嬉しげに微笑んでいた。

「それが、あなたの答えなのね？」

問いかけてくる声も優しい――先ほどまでのそれとは違う種類のものではあったけれど。

何だろう――彼女のこの笑みは、温もりに満ちた気配は。

そう……まるで、喜んでいるかのような……。

不思議に思う緋陵姫は、自身の思いに困惑する。自分の選択に、なぜチェリクが喜ぶと思うのか……わからないものの、それが確かなものに思えて、ますますわけがわからなくなる。

「言ったでしょう、緋陵姫。あなたがどうしたいのか考えなさいと……それがあなた自身が出した答えなら――」

わたしに否やはないのよ――。

慈愛に満ちた笑みを向けられ、緋陵姫は胸の奥に小さな温もりが生まれるのを感じ

た。

それは、これまでただふたりにしか抱いたことのない思い――それがもたらす大切な熱。

チェリクに対して、生まれた熱。

母上――。

自然にその言葉が浮かんだ。

初めて、知識としてではなくラエスリールの記憶を通してではなく、自分自身の心が、チェリクをそうと認めた瞬間だった。

「は……」

母上、とそう呼びかけたい。

チェリクが望んだことだからでなく、自分がそう呼びたい。

その思いのまま口を開きかけた緋陵姫は、しかしその言葉を口にすることはできなかった。

魅了眼に抗った緊張が切れた反動で、全身から力が脱けてしまったのだ。

がくりと寝台に崩れ落ちる彼女に、チェリクが駆け寄ろうとするのが見えた。
「緋陵姫！」
だが――。
母であるひとは、彼女に触れることはなかった。
チェリクの左胸に、深紅の花が咲く。
そして、その背後から現れたのは――。
「こんなところにまで忍び込んで……姉上に何をなさっているのです」
深い怒りと殺意に満ちた声が、誰のものであるかは疑いようがない。
「何をなさっているんです!?」
自らの右手でチェリクの胸を刺し貫いた――
乱華の姿があった。

2

『視えすぎる上に頭が回りすぎるのが、あなたの大きな欠点よね』

昔、遠慮という言葉を自分に対してだけは忘れる親友がそう言った。

『その魅了眼はあらゆることを見通してしまう。おまけに無駄に回転の速い頭はそれを完全に理解してしまう』

『それのどこが悪いというの？　怠けずに頭を使えと言ったのはあなたじゃないの』

親友の言葉を受けて、努力した結果いまの自分があるというのに、否定するとはあまりに酷いのではないのか。

口をとがらせて不満を洩らすと、亜麻色の髪の親友はふう、と息をついた。

『……ごめんなさい、言い方が悪かったわね。そうだわ、あなたの欠点はそれらを台

無しにする想像力の欠如にあったんだわ』

ますます酷いことを言われ、さすがにチェリクもかちんときた。

『マンスラム、あなた、わたしになら何を言ってもいいと思っていない？』

『いいえ？　曖昧さを排除したはっきりした内容でなければ、あなたには届かないときちんと把握しているだけよ？』

これまた——以下略。

『想像力ぐらい、わたしにだってあるわ。そうでなければ、読み取った事象を理解することはできないんですもの』

少なくとも、感情面についてはかなりの想像力を働かせているつもりだったから、本気でそう反論したのだ。

だが、その言葉に親友が返した反応は——やれやれとでも言いたげなため息だった。

『事象理解に使う想像力の半分でも、現実に回してみなさいと言っているのよ』

親友の言うことは、未だによくわからないことが多い。

本音を晒してつき合うようになって数年が経つが、時々理解できないことを言われ

るのだ。

『気をつけているつもりだけど？　ひよっこたちの指導では鬼呼ばわりされるけど、そのおかげで生き延びられたって感謝されることも多いし。大体、飴はあなたの分担じゃない。鞭が甘くなっても若い子たちは混乱するだけじゃない？』

『……だから、そういうことではなくて』

嘆かわしげに頭を振る親友の言わんとするところがそれこそ想像できず、チェリクは降参した。

『お願い、マンスラム。もっと明確に説明してちょうだい』

『ならば言うけれど、チェリク。あなた、若い子たちを訓練している時、それはそれは楽しそうに笑っているのよ、自覚はある？』

うんざりしたように告げられた言葉に、チェリクは首を傾げた。

無自覚だから、ではない。

きちんと自覚していることだ――ただ、なぜそんなことを持ち出されるのかがわからないのだ。

『だって、楽しいんですもの。若い子たちときたら飲み込みが早くて、鍛えたら鍛えたぶん力をつけてくれるのよ。教官冥利に尽きるというものじゃない』

嘘偽りのない本音だった。

だが、それがまた親友のため息を誘った。

『そこが想像力が欠如しているというの！　あなたは教え子の成長を喜んでいるつもりなのかもしれないけれど、訓練直後には食事も喉を通らないぐらい、遠慮会釈なく扱かれる子たちから見れば、自分たちを苛めて楽しんでいる悪鬼よ、あなた』

思いもかけない親友の言葉に、チェリクは言葉を失った。

『どうしてそんな誤解が生じるの!?』

『どうして、そう思われないと思えるのか、わたしにしてみれば、そちらのほうが不思議よ、チェリク』

ショックを受けている自分に、ここまでずけずけ言い切る親友だとて、同じくらい酷いと思うのだが、さすがにここでは口に出さなかった。

今の精神状態では、親友に嚙みついたところで返り討ちにあうのが目に見えていた

からだ。

『そんな……他の教官たちも、教え子の成長を喜んでいるじゃない。どうしてわたしだけ、そんな不本意な誤解を受けるの!?』

呆然として呟いた彼女に、親友は小さな子供にでも対するかのような、噛んで含める口調で答えた。

『他の教官は、あなたのように指導途中でにこにこ笑ったりはしないの。内心の喜びは隠して厳しい態度を通しているの。だから、指導は鬼のように厳しくても、悪鬼教官だなんて呼ばれないの。ただでさえあなたは目を引く容姿をしているのだから、自分の言動が周囲にどう映るのか、もう少しは考えなさい』

せめて、笑顔は褒める時に限定しなさいな。

『でないと、いつか刺されるわよ』

凄みを利かせた親友の忠告を胸に刻み、以降指導中の笑顔を慎んだところ、いつの間にか『悪鬼教官』の評判は消えた。

他にもいろいろと忠告をもらったおかげで、浮城で悪評を立てられることはなくな

っていった。

だからチェリクは、今でも親友に深く感謝している。

自分にだけは棘を隠さない白薔薇のような親友がいなければ、浮城にあっても依頼地にあっても、孤立を免れなかっただろうことは容易く想像できることだったからだ……。

※

背後から感じた衝撃と痛みが意味するところを、チェリクは数瞬、理解することができなかった。

何かが、我が身を貫いているのだと悟ったのは、こみ上げてきた鉄の味が口内いっぱいに広がったときだ。

それが何者による攻撃なのかは、すぐそばから聞こえてくる声のおかげで考える必要がなかった。

「姉上に何をなさっているのです！　以前、言ったはずです、あなたの出る幕などないと……身の程も弁えずしゃしゃり出てきて、挙句に姉上を害そうとするなどっっ！」

わたしが許すと思いますか⁉

極寒の地に吹く風にも似た声と吐息が、背後から届く。

ああ、と真紅の雫を唇からこぼしながら、チェリクは思った。

マンスラム……せっかくあなたが忠告してくれたのに、わたしはまた失敗してしまったようだわ……。

緋陵姫の決意を耳にした瞬間、笑ってしまったのがいけなかったのだろうか。

リーダイルの目に、それは嬉々として彼女を嬲る姿に映ったのだろうか。

いや、完全な彼の誤解とは言い切れない。緋陵姫の決意を聞くまでは、確かに自分は本気で彼女の命を解こうとしていたのだから——肉体だけでなく、魂までも蝕まれたもうひとりの娘を、手遅れになる前に解放するためには、他に方法はなかった。

だが、それが自分の独善だということも、緋陵姫に指摘されるまでもなく自覚していた。

それでも、緋陵姫が受け入れるなら、それも許されると思った。
選ぶのは緋陵姫だ。彼女自身が己を蝕み苛む影から解放されたいと願うのであれば、この力で完全に彼女を解くつもりだった。
完全に解かれた命も魂も、冥の海へ向かうことはないが、この先待つ奈落より深い淵に沈むこともない。
どちらでもいいと思って力を仕掛けた。
だから……そう、確かにリーダイルは誤解したわけではない。
ただ、できればもう少し後に登場してくれたら無用の流血は避けられたに違いなく、それだけは残念だった。
「リーダイル……」
掠れた声が紡ぐ名に、背後の気配が怒気を増した。
「その名で呼ぶなとも言ったはずです！」
怒りのままにチェリクの胸を貫いた彼の右手が、乱暴に引き抜かれる！
反動で、前に倒れかけたチェリクは、渾身の力で背後を振り返った。

蒼白な顔をして、自分を見つめる息子の顔をひたと見据えたまま、彼女は魅了眼を発現させた。

室内を満たす気配すべてを支配下に置き、その力で以て、リーダイルの全身を拘束したのである！

「あなたは少し黙ってなさい……わたしは、まだ……」

肺が破れたのだろう、思うように声が出せない。

それでも、譲れないことがある以上、チェリクは動かなければならなかった。

「まだ、緋陵姫との話が……終わってないの……」

胸に穿たれた傷に手を当てる。

これほどの損傷は、この身に宿る気だけでは塞ぐことはできない——いかに鬼子と呼ばれ、また強大な魅了眼を生まれ持っているとはいえ、肉体と気は人間のものに過ぎないのだから。

室内を満たす闇を使えば、あるいは傷を癒すことはできるかもしれない。

だが、それでは意味がない。

女皇が支配する闇を用いれば、その瞬間にも、自分の肉体は女皇の支配の枷を受ける。それだけはできない。

「緋陵姫……」

体内の気を寄せ集めて、危険な部位の止血だけをすませると、チェリクは再びもうひとりの娘に向き合った。

「もう一度だけ、確認させてちょうだい……先ほどのあなたの言葉……」

あれが、あなたの選択なのね？

思いがけない展開に、緋陵姫の顔も蒼白となっていた。

リーダイルとチェリク、どちらをより心配すべきか迷っているようにも見える――リーダイルほど割り切れないのは、やはりラエスリールとともに生まれた命だからだろうか。

「緋陵姫？」

答えを促すために名を呼べば、彼女は無言で頷いた。

――わたしの命も存在も、最期までわたしのものです！

傍から見れば破滅としか思えぬ未来へと、それでも踏み出すと決めた娘――その道行きを思えば、母としては切ないが……同時に彼女が誇らしくもある。

だから、自分は母親として、緋陵姫に最初で最後の贈り物をしよう。

ここに来る前に、もしも彼女が解放でなく生を望むなら、与えようと決めていた――。

少しばかり汚れてしまったけれど、そこは勘弁してもらおう。

完全には止まらぬ血を押さえながら、チェリクは緋陵姫に語りかけた。

「緋陵姫……聞いてちょうだい。あなたの決意を尊重する代わりに、わたしの願いをひとつだけ叶えてほしいの。受け取って欲しいものが……あるのよ」

緋陵姫の唇が震えている――声にならない声が、もう喋るなと伝えてくる。

気遣ってくれているのだ。優しい娘なのだ。魔性ゆえの残酷さとともに、他人を思いやる気持ちも併せ持つ――根本的なところで、人間と魔性はさほど変わらないのかもしれない。

こんなことを口にしたら、またイズヴァンに雷を落とされるでしょうけど……。

脳裏に浮かぶ、養父代わりの破妖剣士の顔は、いつも渋面だ。それだけ自分が気苦労をかけていた証拠なのだが、彼のそんな顔が好きだった。

鬼子だと遠巻きに見るひとも少なくなかったこの世界で、その事実を受け入れながら、それでも当たり前のように叱り飛ばしてくれたひとたち——恐れながらも慕ってくれた弟子たち……そして子供たち。

愛するもので、この世界は満ちている。

だから、こそ——。

「……受け取って、ちょうだい？」

真っ直ぐに、緋陵姫の瞳を見つめながら、チェリクは力を行使した——。

3

乱華を絡め取る闇の拘束が消えるのと、ふたりの女性が崩れ落ちるのはほとんど同時のことだった。

「姉上！」

床に倒れた母ではなく、彼が選んだのは姉と慕う女性だった。

胸を貫いた感触は生々しく残っているが、それでも彼に悔いはなかった。戻ってきたチェリクは彼にとって母ではなく、緋陵姫を脅かす敵だったからだ。

彼女に頼まれ部屋を離れたものの、不吉な予感を覚えた彼が、戻って目にしたのは緋陵姫に向かって魅了眼の力を放つチェリクの姿だった。

かつては自分にも備わっていた魅了眼――だからこそ、乱華にはすぐにチェリクが

なにをしているのかがわかった。

緋陵姫の命を肉体ごと分解しようとしているのだ、と。

それを悟ったからこそ、あの日、初めて甦ったチェリクを前に、緋陵姫はあれほどに怯えていたのだと。

ふたりの会話はよく聞こえなかったが、乱華が攻撃を仕掛けるには、目の前の現実だけで充分だった。緋陵姫を害する者など、彼が認められるはずがないのだから。

その肉体を貫いた時、右手を濡らした熱い真紅も、彼の心を動かすことはなかった。致命傷を与えた事実さえ、大した意味はなかった。

だが——後悔したのはその直後、チェリクの操る闇にその身を拘束されたときのことだ。反撃する暇など与えずに即死させるべきだったと心から悔いた。

それからのほんの数分ほど、自由を奪われた我が身の甘さを憎んだことはない。

間もなく死に至ると悟ったチェリクが、弱った姉に何を仕掛けるつもりなのか——見ていることしかできない時間こそが地獄だった。

「姉上！　姉上！　しっかりなさってください！」

寝台に駆け寄り、力なく倒れ伏した緋陵姫の体を抱き起こした瞬間、乱華は絶望に大きく喘いだ。

緋陵姫の魂は、すでにその肉体に宿ってはいなかった！

「姉上、姉上！　嘘だ！　こんなことは嘘だ！　姉上、どうか目を覚ましてください！　心配をかけてすまないと謝ってくだされば、今回だけは許して差し上げますから！」

声を張り上げ、乱華は必死に姉の体を揺さぶった。

すでに意識はそこにはない――わかっていても、そうと認めることができない。

ここにないなら、緋陵姫の魂はどこへ消えたというのか。自分が動けずにいたあの僅かな時間で、瀕死の母にしてやられたなど、どうして受け入れられるだろう！

「姉上、姉上……っっ⁉」

呼びかけていた乱華が、その肉体の異常に気づいたのは、彼の行為がもたらした結果ゆえだった。

ぼとり。

重い音を立てて何かが、掛布の上に落ちた。
なんだ？
怪訝に思い、そちらに目を向けた乱華は、驚愕に息を呑んだ。
彼が揺さぶった緋陵姫の体から――壊死した組織ごと、その腕がもげ落ちたのだ！
「何だ、これは……どういうことなんだ!?」
チェリクの仕業かと一瞬疑った乱華は、しかしそうではない可能性のほうが高いことを直感した。
伏せることが多くなった緋陵姫――城外に出たのは、チェリクと見えたあの日が最後だ。
城内を歩く姿さえ、目にすることは少なくなった。緋陵姫を案じる女皇が、部屋で休めと命じたからだとずっと信じていた。
だが、もしかしたら……？
姉の不調は、ずっと以前から生じていたのではないのか？
それを彼女が隠していただけなのでは――？

「なぜです……なぜ、こんなになるまで隠す必要があったのですっ⁉」

揺さぶっただけで容易く千切れ落ちるほど壊死が進むまで——いや、そもそもいつ、こんな傷を負ったというのか。

ラヴィスか？

いや、あの街で緋陵姫は傷など負わなかった——少なくともあの時点では、彼女の力は以前と変わらぬほど強大だった。新参の妖貴の腕を容易く吹き飛ばしたのだから。

では、いつ……いつだ？

女皇はこのことを知っていたのか？　いや、知るはずがない——自分を邪魔だと公言するあの闇の化身は、姉への執着を隠そうともしていない。姉のこの状況を知っていれば、手をこまねいているはずがない。

女皇は、知らなかった——それは確実だ。姉は自らの状況を、女皇にも隠していた……それはなぜか。雛の君と呼ばれていた頃ならともかく、女皇となった少女であれば、姉を救う手立てなどいくらでも講じてくれたに違いないというのに……。

と、そこまで考えた時、乱華はひとつの恐ろしい可能性に気づいた……。

回復も追いつかないほど、壊死の進んだ肉体を抱える緋陵姫を救うために、最も有効な方法とは何か。

新たな肉体を彼女に与えることだ。

しかし女皇は、緋陵姫の容姿も含めて彼女を愛していた。彼女の魂を別の器に移し替えるにしても、まるで違う外見のものを選ぶことはないに違いない。

その時、女皇は思い出すだろう——緋陵姫と瓜二つと言ってもいいほどに酷似した容姿を持つ存在を……ラエスリールを。

緋陵姫のための新たな器として！

「……だから、ですか……だから、なのですね……」

他には考えられない。

ラエスリールを守ると誓った身が、逆に彼女の命を脅かすことなどあっていいはずがない——緋陵姫はそう考えたのだ。

だから、彼女は隠し通した。乱華が彼女の立場でも、きっと迷いなく同じ選択をしただろう……だが。

「ですが、姉上。わたしにまで隠すとは、水臭すぎるではありませんか。わたしがあなたを悲しませるようなことをするわけがないと、あなたは誰よりわかっているはずではありませんか。いいえ、わかってますよ……わたしに心配をかけないためでしょう？　それぐらいわかってますとも……それでも、今になってこんな思いを味わわせるくらいなら、山のように心配をかけてほしかった……もっと早くに知っていたら、女皇が女皇となる前に、ふたりで姿を隠す算段だってつけられたかもしれないではありませんか。もう少し、頼ってくれても良かったのに……ラスもあなたも、どうして……」

嘆きは尽きない——繰り言だとわかっていても、大きすぎる喪失を前に、乱華は言葉を止めることができなかった。

視界の隅で、事切れたと信じた黒髪の女性がぴくりと動いたのを認めるまで——。

真紅の血だまりのなかで息絶えたはずの女性の指が、小さく震えるのを目にした瞬間、乱華の胸中を襲ったのは自身でも制御できぬほどの怒りだった。

なぜ——！

姉ではなく、この女が生きているのか。同じく命を散らしたのなら、まだ許してやれたものを……人間に過ぎぬ身で、どうして、どうして、どうして、どうしてっ！

どうして認められよう、このような理不尽を！

姉が死んだのだ、この女も死ぬべきだ――姉の命を摘み取った者が、ほんの少しでも姉より長く生きるなど許せることではない。

「お前などっ！」

激昂のまま、乱華はチェリク目がけて力を放とうとした。

自分たちの母はとうに死んだ。ここにあるのは亡霊に過ぎない。そんなものは跡形もなく消し去るべきだ！

もしもその刹那、耳に届いた声がなければ、彼は間違いなくそれを実行していただろう。

「……ん、か……？」

弱々しい、だが失われたと一度は信じたそのひとの、自分を呼ぶその声がなければ。

呆然とする彼の耳に、今度こそはっきりと、その声は響いた。

「……乱華……？」

声は、床に倒れた女性から放たれていた――。

※

「母上は、あの時、すでに見抜いてらしたんだ……」

乱華に抱き起こされた格好のまま、チェリクによって魂を移し替えられた緋陵姫は告げた。

失血のせいで、体に力が入らない。

だが、朽ちるのを待つばかりだったあの肉体に比べれば、嘘のように体が軽い。

「冥の海から現世に戻ったわたしがいずれこうなるだろうことを……雛の君の力を以てしても、完全に生き返るのは無理なことなのだと……」

今は緋陵姫の器となった、チェリクの体を抱き起こす乱華の腕は優しい――だが、その表情は不機嫌さを隠せない。

「だからといって、姉上の命を解こうとするなど、乱暴に過ぎます。あのひとは、あの時間違いなく本気でした。あのひとを止めたことを、わたしは後悔するつもりはありません」

意地を張る子供のような反応に、緋陵姫は思わず笑みをこぼした。

この弟をひとり残さずにすんで、本当によかったと心から思う。

「母上は、どちらでも構わないと思ってらしたんだよ。わたしが苦しみから逃れるために分解を受け入れても、生きるために足掻くことを選んでも、どちらでもいい……どちらでも許すおつもりだったんだ。そして、わたしが後者を選んだら、迷わずこの器をわたしに与えるつもりで……だから、自らいらしたんだ」

しかし、この言い分にも乱華は納得できない様子だ。

「なぜ、二択なのです。最初から姉上にその体を与えるというのなら、わたしだって傷つけたりはしませんでした」

乱華は意地でもチェリクに素直に感謝しようとしない。

半分は、自分への怒りもあるのだろうが、もう半分は母への屈折した甘えがもたら

す反応だった。

理不尽なまでの怒りも、結局はその裏返しだ。

「……それが完璧な解決策となるのなら、母上は躊躇うことなく選ばれたと思うぞ」

くすくすと笑いながら、緋陵姫は敢えて失言を装った。

真実と向き合う覚悟はつけたものの、それでもこの弟にそれをどう伝えていいものか、踏ん切りがつかないのだ。

はたして、乱華が怪訝そうに問い返してきた。

「完璧ではないとは、どういうことですか？　まさか、わたしがつけた傷が原因ですか⁉」

さっと青ざめた弟に、緋陵姫は「違う」と否定した。

「意識あるいは魂の問題だ。冥の海に落ちた時点で、現世に存在しつづけるのが難しいのは魂も同じということだ。肉体ほど急速にではないが、この魂もいずれそう遠くないうちに朽ちる運命にある。女皇に隠していたのは、お前も気づいたとおりの懸念があってのことだが……お前に隠したのは、お前がそんな顔をするとわかっていたか

らだよ」

今にも泣き出しそうな顔の青年の頬にそっと触れる。

「姉上」

「……いろいろ考えた。朽ちていくばかりの自分では、いずれお前やあれの足手まといにしかならなくなる。それどころかお前たちを縛る枷として利用されるかもしれない。そんな無様な姿をさらすぐらいなら、いっそ消えてしまったほうがいいのではないかとか……母上の力に抗わなかったのはそのせいだ」

「姉上！」

淡々と告げる緋陵姫に、乱華が責めるような声を上げた。

「わかっている。我ながら気弱になっていた。そのことを母上が気づかせてくれた……理屈も言い訳も関係ない、生きたいから生きているんだと。それはわたしが生きている間変わることがないのだと。そう言ったら、母上は嬉しそうに微笑まれたよ」

思い出すだけで胸が温かくなるような笑顔だった。

しかし、乱華はますます機嫌を損ねたように顔を顰めた。

「姉上。あの……母上に感謝しろとおっしゃるのなら、いくらでも感謝しますし、謝れとおっしゃるのであれば、何度でも謝りますから、そろそろ話題を変えませんか？」

これは、もしかして焼き餅だろうか、と緋陵姫はこっそり思った。

問題は、どちらに対して抱くものかということだが……きっと自覚なく両方に対して抱いているのだろう。

可愛い弟のわがままだ、聞いてやりたいのはやまやまだったが、こればかりは告げておかなければならないことが残っている。

緋陵姫は知らぬ顔で続けた。

「なあ、乱華。わたしもあれも含めて……わたしたちは、自分たちで思っている以上に父上と母上から愛されているのかもしれないな」

「かけらも愛されていないとは言いませんが、そのお言葉ばかりは同意できませんね。まあ、姉上への母上の愛情に関しては認めないでもありませんが……」

どうやらそこだけは譲る気になったらしい。

「お前は聞こえなかっただろうが、乱華。母上が魅了眼でわたしの魂をこの体に移し替えられる時おっしゃったんだよ。自分にも、母親として譲れない意地がある、我が子に親殺しの罪を背負わせることだけは絶対に許せない、と」

乱華の瞳が驚きに瞠られる――緋陵姫はそう告げるチェリクの声を思い出した。

『いろいろと至らない母親だった自覚はありますけどね、わたしにだって、母親として絶対に譲れないことはあるのよ』

くすくすと笑いながら、朗らかに彼女は言い切ったものだ。

『可愛い我が子が今にも腐れ落ちそうな体に縛りつけられているのを見過ごすつもりは皆目ないし、もうひとりの我が子にも、親殺しの罪なんて絶対に背負わせない！これは親としてのわたしの意地よ、あなたたちにだって、邪魔はさせないわ』

かつてラエスリールのために命を捨てたひとは、今度は自分たちふたりのために自らの命を手放した。

これほどの愛を示されて、信じないほうがどうかしている。

乱華はいまは意固地になっていて、何を言っても頷かないだろうから、時間をおい

て話してやろう。

乱華がそばにいない間の会話も全部聞かせてやりたい。自分にとっても、あのひとは紛れもない母親だったと……愛して止まないひとになったのだと、意地っ張りな弟が根負けするまで何度だって繰り返そう。

そう、その時は――。

「裂け目などない蒼穹が、見たいな……」

ぽつりと洩れた唐突な一言に、乱華はしかし静かに頷いた。

「そうですね、空はどこまでも広がっているほうがいい」

それはこれから始まる戦いの結果次第だ。

緋陵姫はゆっくりと起き上がった――まだ多少ふらつくが、乱華の治療で傷は塞がった。これ以上を望むのは贅沢というものだ。

「さて、行こうか」

「ええ」

世界の命運を背負わされた姉妹のもとへ、ふたりは揃って歩き出した――。

向日葵の海

プロローグ

その日、ラエスリールは浮城の事務を請け負う局の人間から声をかけられた。
「ラエスリール、待って。あなたに荷物が届いているわ」
それは月に一度の、外部から届いた書簡や荷物が配られる日のこと。
だが、これまでラエスリールがその「日」に荷物を受け取ったことなど一度としてなかった。
浮城の外から、彼女に手紙や荷物を送るような相手はいなかったのだ。
それが当たり前のことになっていたので、彼女自身それを寂しいとは思っても、そういう縁がない以上仕方がない……とその現実を受け入れていた。
だから、これまで無縁だった事務局の女性からかけられたその言葉に、思わず首を

傾げてしまったのだ。

「荷物？　わたしに？」

思い当たる節が全然、まったく、皆目なかった。

側に最近親しくなった少女がいれば、「不審物？」との声を上げたかもしれないが、幸いこの時、ラエスリールの側には誰もいなかった。

「何かの間違いでは、なくて……？」

首を傾げながら確認を取ると、憤慨したような答えが返ってくる。

「そんな杜撰な分類はしないわよ。ヨエル国北部のママル郡ナリル村の村長の署名があるし、ここはあなたが以前派遣された場所でしょう？」

言われてみれば、確かに地名に覚えがある。

破妖剣士としての初仕事を終えた後、ようやく派遣されるようになった依頼地のひとつだったと記憶している。

ただ、わからないのは、なぜ今自分に荷物が送られてくるのか、だ。

依頼内容は完遂した。

人知れず子供たちの命を啜り取っていた魔性は排除した。

それだけのことだったはずだ。

あれから、一年近くが経つ。

なぜ、今頃かの地から、荷物を送られてくるというのか——ラエスリールにはわけがわからない。

「……なぜだ？」

心底困惑して首を傾げる彼女に、しかし忙しい事務局の女性は同調してはくれなかった。

「そんなの知らないわよ。いいから、本人確認の証拠にここに署名して。免疫なくて知らないようだから言っておくけど、向こうにとったらあなたは大恩人さまよ。何年だって何十年だって、お礼の気持ちを送り続けてくるって例も珍しくはないわよ。うっかり『カボチャが好き』と洩らしたせいで、村総出で美味しいカボチャ改良に乗り出して十年以上カボチャ攻めにあったひともいるって話だし。そうなりたくなければ、早々に向こうに断りを入れるなりなんなりしてちょうだい。あの大量なカボチャには、

ほんと……苦労させられたんだから」

最後のあたり、本当にげんなりしたような声で告げられた。

もしかしたら、大量に送りつけられてきたカボチャの始末に彼女も駆り出されたのかもしれない。

そういえば、一時期浮城の食堂のメニューがカボチャ尽くしになったことがあったような記憶が脳裏に蘇る。

確かあの時はカボチャスープにカボチャケーキ、カボチャ麺にカボチャ汁……やたらにカボチャの四文字がメニューの黒板で踊っていたように思う。

「早く受け取りの署名してちょうだい！」

苛立たしげな女性の声に促されて——急かされて、ともいう——ラエスリールは書類にペンを走らせた。

そうして、手渡されたのは子供の頭ぐらいの大きさの紙包みだった。

持ったところ、あまり重くはない。

何だろう——？

やはり、思い当たる節はない。

首を傾げながら、ラエスリールは自室へと戻り、丁寧に梱包を解いた。

そうして、彼女が目にしたのは――。

「あ」

麻袋に詰められたものを目にして初めて、ラエスリールはそれがなぜ、送られてきたのかを理解したのだ。

麻袋いっぱいに詰められた、それはひまわりの種だった――。

1

春だった。

魔性の脅威から解放された村の外れで、子供たちが一心に土を掘っていた。

依頼を終えて二日――村長に報告すると同時に浮城へ帰還するつもりだったラエスリールは、しかし村人たちの懇願に折れる形で、村の滞在を延ばしていた。魔性相手の憎まれ口だけは淀みなく紡げるものの、人間相手にはとことん口べたな彼女は、善意と感謝と熱意に溢れた村人たちを前に、ろくに反論できなかったのだ。

だが、さすがに明日は浮城へ戻らねば、と思っていた。

押しかけ護り手である男のおかげで、浮城への任務完了の知らせだけは送ることができたが、詳細については書状だけでは不十分だ、早々に帰還し、報告する必要があ

る。

問題は、それをどう村人たちに誤解のないように伝えるかである。

はっきり言って、自信がない。

鉄面皮と言われるほどに表情が乏しい上に言葉の使い方が下手だという自覚のある彼女にとって、善意溢れる村人たちの申し出を上手に断るというのは至難の業だったのだ。

『面倒なら、夜の間にこっそり抜けだしちまえばいいんじゃない？　おれ、そういうのは得意だよ？』

とは、深紅の男の提案だったが、それはさすがに気が引けた。

辞去の挨拶ぐらいは、やはりきちんとしておきたい。だが、彼女がそれを口に出す度に引き留められるのもこの数日の間に何度となく繰り返されたことで……本当にどうしたものかと、彼女は心底困っていた。

だから、外の空気を吸いたいと言って散策に出たのも、上手い言い訳がないか考えるためだった。

もっとも、絶対的に経験値が不足している彼女がいくら考えたところで、無難な言い訳が浮かぶはずもなかったのだが。

難しい顔をしたまま村を散策していた彼女は、そうして村の外れまでたどり着き、泥まみれになりながら土を掘る子供たちと遭遇したのだ。

「……何を、してるんだ？」

素朴な疑問が知らず口を衝いて出ていた。

それに気づいた子供のひとりが振り返ると、ぱっと顔を輝かせた。

「破妖剣士のお姉ちゃんだ！」

その声に、他の子供たちも一斉にラエスリールを振り返った。

「本当だ、お姉ちゃんだ！」

「怖い鬼を倒してくれたお姉ちゃん！」

「みんなの仇を討ってくれたお姉ちゃんだ！」

叫びながら、子供たちは立ち上がり、あっという間にラエスリールを取り囲んだ。

そうして口々にありがとうを繰り返す。

二年以上、子供ばかりが命を落とす事故が続いたせいで子供たちはあまり自由に外に出られなかったと聞いている。さらにはそれが魔性に因るものだと知れた後には、ほとんど家の中に閉じ込められる格好になったとも。

勿論、それは村の大人たちが子供たちを守るためにやむなく取った処置であり、間違ってはいなかったのだが、こうしてようやく自由に外に出られるようになった子供たちの輝く顔を見れば、それがどれほど彼らに我慢を強いるものだったかがわかる。

よかった、とこの時ラエスリールは心から思った。

子供たちが、こうして自由に外に出られるようになって、本当に良かった、と。

「みんな、何をしていたんだ？」

泥まみれになりながらも、楽しげな子供たちが何をしていたのか、純粋に気になって訊ねた彼女に、一番年長らしい男の子が胸を張って答えた。

「種を蒔いてたんだ」

別の子供が補足するように続けた。

「一昨年、みんなで決めたんだ。ここにひまわり畑を作ろうって。種も集めてたんだ

けど、怖い鬼のせいで、みんなここまで出て来られなくなって……だから、一年延びちゃったんだけど」

その時の子供たちの目に、何かを懐かしむような光が浮かんだのは、一緒に約束した誰かが、今この場にいないからかもしれなかった。

「そうか……向日葵か。向日葵は、わたしも好きな花だ」

ぽつりと洩らしたラエスリールの一言に、子供たちは驚いたように「ええ！」と声を上げた。

「お姉さんもひまわりが好きなの？」

「実は一番好きな花なんだ」

太陽のような花――金色の花。

それは焦がれて止まないある人を彷彿とさせる。

「じゃあ、お姉さんもひまわりを育てているの？」

無邪気な子供の問いかけに、ラエスリールは苦い笑みとともにかぶりを振った。

「いや」

「どうして？　好きなんでしょう？　なのにどうして育てないの？」

真っ直ぐすぎる問いかけに、彼女はすぐには答えられなかった。

恐れ多すぎるから――。

向日葵は、あまりにもあのひとを連想させすぎて、それを自分の手で咲かせるとか考えられない。

けれど、そんなことをいままさに種を蒔こうとしている子供たちには告げられない。

だから、ラエスリールはもう一つの理由を正直に答えたのだ。

「種を、持っていないんだ」

焦がれるほどに大切な人を彷彿とさせる黄金の花――あまりに大切で、あまりに神聖で……だから、似た花をこの手で育てることさえ思いもつかなかった。

そんな彼女の複雑な思いが、子供たちに伝わるはずはない。

それでも、彼女が向日葵を焦がれるほどに好きなことはわかったのだろう。

子供のひとりが言った。

「じゃあ、僕らがここでいっぱい花を咲かせていっぱい種を作ってあげる！　そうし

てできた種をお姉ちゃんにあげるね！」

と。

その提案に、他の子供たちも次々に同意した。

「いっぱい、いっぱい作って、お姉ちゃんにもいーっぱい種をあげるからね！」

泥だらけの小さな手を握りしめながら、その場に集まっていた子供たちは口々にそう約束してくれた。

その想いの結晶とも呼ぶべきものが、今ラエスリールの手の中にある。

凍りついたような彼女の表情筋の一部が緩み、世にも珍しい柔らかな笑みがその口元に浮かんだとしてもそれは無理からぬことではあったのだが――。

そのとき、彼女のそばにいたのは、猫の額ほどの寛容さも持ち合わせぬ狭量な心根の主だった。

漆黒の真っ直ぐな髪と濡れたような輝きを放ちながらもどこか燃えるような……陽炎を上げる黒瞳を持つ少女は、当時を懐かしむラエスリールのそばに出現すると同時に、ごくごく冷ややかな声で問いかけたのである。

「それ、なに？」

と。

それは、現在不在の押しかけ護り手である深紅の青年と入れ替わるかのようなタイミングでラエスリールのそばに現れた漆黒の魔性の少女――茅菜（ちな）だった。

2

冬の間雪に閉ざされ、外界との接触が取れぬ村を狙った妖鬼によって、その村の子供の数は秋を迎える頃の半分近くに減っていた。

貧しい暮らしを支えるためには、子供たちも労働力に数えられる。

子供たちもまたそれを当然のことと捉え、率先して自分にもできる仕事を引き受ける。

水くみ、家畜への餌やり、食事の後片付け等々——かじかむ両手に息を吹きかけながら、それでも家族の役に立とうと健気に働く子供たちが、卑劣な妖鬼の罠に誘い込まれたのだ。

白い息を吐きながら、重い水桶を抱えて家に戻る子供に、ある時は暖かな焚き火を

見せて「あたってお行き」と誘い、ある時は湯気の立つ汁物を持った椀を差し出し「食べてお行き」と優しく告げた。

狭く小さな村のことだ。

見知らぬ人間などいない村のこと、通常であれば、子供たちも知らぬ相手の甘い誘いに乗るようなことはなかったろう。

だが、妖鬼は子供たちの感覚を惑わせた。

それが見知らぬ相手だと認識できぬよう——さらにはよく知る相手であるかのように錯覚させて、子供たちを餌食にした。

数十年にわたるこの悪行が発覚しなかったのはふたつの理由に因る。

ひとつ、子供が命を落とすのは、二年から三年に一度であること。

ひとつ、その子供の遺体は損傷のない状態で発見され、普通に弔われていたこと。

妖鬼は用心深かった。

村の大人たちの警戒心を招かぬために、数年に一度だけ、子供の肉体に損傷を与えることなく、生気だけを啜り取っていたのである——水源地である泉に浮かぶ子供た

ちの死因が魔性に因るものなのだなど、到底誰も想像できなかったのだ。
その事実が発覚したのは、まさに偶然としか呼びようのないことだった。
妖鬼が好んで命を啜るのは、健康な生気に満ちた子供ばかりだった。
だからこそ率先して家の手伝いをし、村から少し離れた泉にも水くみに出かけていた。
そんな子供たちが、数年に一度悲しい事故に遭う——足下が滑って溺れたに違いない……外傷なく泉に浮かぶ子供の遺体を前に、村の大人たちはそうとしか判断できなかった——あるひとりの子供が、震えながら告げた言葉を耳にするまでは。
その子供は寒さに弱く、冬が近づくと熱を出すことが多く、両親から外出を制限されていた。
数年に一度、健康な子供でさえ泉で命を落とすのだ——寒さに弱い子供であれば、さらにその可能性は高くなる、とその両親は考えた。
我が子を守るために両親が出した外出禁止令は、しかし子供にとっては我が身の自由を制限する枷としか思えなかったのだろう。

隣家の同い年の幼なじみが雪の中で楽しそうに遊んでいるのを窓越しに見つめるしかない状況にあっては尚更というものだ。

ある日、子供は体調が良かったこともあって、こっそりと家を抜け出し、近所の子供たちの後を追った。

彼らが遊ぶために出かけたわけではないことは知っていたが、自分が知らない世界のことを当たり前のように話すのを聞いて、彼らの見る世界を少しでも知りたいと思ったからだ。

だが、そこで子供が目にしたのは——友である村の子供たちが、恐ろしい姿の魔性に命を啜り取られる残酷な光景だったのだ！

子供は寒さではなく恐怖に震えながら、その場を動くことができなかった。そうして、全てが終わった後、倒れ伏していたところを捜しに来た村人に見つけられた。

もともと病弱だった子供は、これから三日というもの生死の境を彷徨った。

そうして四日目、ようやく意識を取り戻した子供の口から、事の真相が語られたのである。

村人たちは愕然とした。

これまで不幸な事故だとばかり思っていたものは、全て魔性のせいだったのだ。そしてこのままでは、『不幸な事故』は繰り返される——村の子供たちの命は、いつまでも魔性に刈り取られ続けるのだ。

豊かとは言い難い村ではあったが、大人たちの決断は迅速に下された。

このあと何年も、借金の返済に追われることとなろうとも、子供たちの無事を優先することを決めたのだ——浮城に魔性退治を依頼することを。

そうして、浮城が派遣したのが、破妖剣士ラエスリールだった。

浮城最強の破妖刀紅蓮姫の使い手——だが、その制御は未だおぼつかなく、またその護り手も得体が知れない。

あるいは浮城の上層部は、彼女がこの先まともな戦力となるか否かを見極めるためにこの依頼を利用したのかもしれない。

暴走を繰り返す破妖刀、信じるには問題がありすぎる出自を持つその使い手——その護り手までもが得体が知れぬというのでは、試したくも……否、試さずにはいられ

なかったというところだろう。

結果的には、ラエスリールは村の子供たちの命を啜り取っていた妖鬼を倒し、村を魔性の脅威から救ったわけではあるのだが。

「……とまあ、そういうことで知り合った子供たちとの約束だったんだ」

届いた向日葵の種を嬉しそうに眺めるラエスリールの様子につむじを曲げた幼い魔性を相手に、彼女は状況を説明した。

しかし、説明を受けた少女の反応は今ひとつ読めない。

つんとした態度を崩さない黒髪の少女は、ラエスリールの手から件の麻袋をひょいと取り上げるなり、「それで、どうするの？」と問いかけてきた。

「どうする、とは？」

意味がわからず首を傾げたラエスリールに、茅菜は苛立たしげに——癇癪を起こす一歩手前のような勢いでさらに問いを重ねてきたのだ。

「だからぁ！　この種をどうするつもりなのかって話！　これ全部植えるなら、浮城の菜園全部つぶれちゃうんじゃない？　鉢植えにするにしても、ラスの部屋には到底

収まり切れないでしょ？　だいたい、その土だって馬鹿にならない量になるでしょ？」

何だか前もって駄目出しされている気分だ……こちらが何かを考えて提案するより先に「だめ、だめ、だめ」と言い切られているような……。

それは何かが違うと思う。

絶対的に、何かが違うと思う。

「茅菜！　勝手に決めつけるな！　いいから、それを返すんだ！」

そう、叫んだ瞬間のことだった。

「ラスの馬鹿ーっっ！」

幼い妖貴の少女の叫びと同時に、その姿が煙のごとく消え失せた——ラエスリールから奪い取ったあの麻袋とともに。

3

茅菜は、ものすごく面白くなかった。

生まれて間もないと自身を認識している茅菜は、自分が人間の感情の機微に疎いという自覚はある。

だから、いろいろと我慢しながらそうしたものを学習していこうとは、一応思っているのだ——必ずしも実践できているとは言えなくとも。

なぜなら、ラエスリールのそばにいたいから——今でも彼女が人間だなんて正直なところ信じられないけれど、それでも彼女やその周囲がそう言っているし、何より彼女がそうあることを望んでいるようなので、その意志は尊重しようと思っている。

そして、そんな彼女のそばにいるためなら、多少面白くないことがあっても、我慢

しようと思ってはいるのだ——一目で惹きつけられたあの輝きゆえに。

だけど、だけど、だ！

あんな顔するなんて、許せない！

そう思ってしまう心は止められなかった。何かを思い出すような目をしたラエスリールが、あの時浮かべた微かな笑みがどうしても許せない。

あれは多分、本人も自覚のないものだ。

過去を懐かしく振り返り、知らずに微笑んだものなのだ。

だからこそ——尚更腹立たしい。

あんな顔を、ラエスリールは茅菜の前で見せたことがない。あんな風に、固い蕾が僅かに綻ぶのにも似た、あんな笑みは茅菜が初めて目にしたものだ。

それが、この向日葵の種の送り主に起因するものだとすれば、到底こんなものを持たせておくわけにはいかなかった。

上級魔性にありがちな性情として、茅菜もまたこれと認めた存在への執着心は強い。独占欲と言い換えてもいい。不本意ながら、ラエスリールを独占してどこかに閉じ込

めたりすることは、本人に嫌われることに直結しているようだから諦めるしかないが、だからと言って、彼女が好意を向ける相手が増えるのを黙って見ているつもりはない。

こんなモノを送りつけて来なければ、自分はラエスリールのあんな顔を見ずにすんだのにという思いは、茅菜を危険な企みへと誘導しかけた。

二度とこんなモノを送って来られないように始末してしまおうか、と。

しかし、茅菜はすぐにこの考えを切り捨てた。

ラエスリールのそばにいるのが人間だけなら、それはいとも簡単にかなうことだ。

だが、彼女のそばにいるのは人間だけではない。

邪羅とかセスランとか邪羅とかセスランとか邪羅とかセスランがどうしても邪魔だ。

彼らさえいなければ、ラエスリールの心を動かした不届きな人間の子供数人など瞬殺して知らん顔して、万一子供たちの死を知ったラエスリールが悲しんでも、それをすぐそばで慰めるという手も使えるが、あのふたりがいる以上、どうにもそれは難しい。

ならば、この荷物を利用して、少ーしぐらいラエスリールに八つ当たりしても、そ

れは許される範疇ではないのか。いや、充分に範疇内に違いない。何しろ自分は、この種の詰まった袋ひとつのために、ものすごーく不愉快な思いを味わわされたのだから！

「そうよ、ラエスリールは少しぐらい苦労してもいいはずだわ。だってあたしにこんな思いをさせたんですもの。こんな、面白くない、はっきり言って不愉快な思い、このあたしが我慢してあげてるんだもの！」

口にしたことで、茅菜はすっきりした。

そうだ、全部ラエスリールが悪い。だから自分は悪くない。

ただし、さじ加減は必要だと本能的に感じ取った彼女は、送り主である子供たちの抹殺に加え、この種自体の抹消は諦めた——そんなことをして、ラエスリールに嫌われては元も子もないと思ったのだ。

本当に、あの邪羅とかセスランとかがいなければ、きっと簡単だったろうに……邪魔だ邪魔、本当に邪魔。

けれど相手は思念だけで命を落としてくれるほど可愛らしいシロモノではない。

「知らなかった……世界って、こんなに不自由なものだったのね」

しみじみ呟く茅菜のこの言葉を聞いた者がいたならば、激しく抗議したに違いない。

ちょっと思い通りにならないことがあるぐらいで文句を言うな、と。

だが、この時点において、茅菜の心境はまさにこの一言に集約されていたのだ――世界は思うがまま。

それが、世界を支配する一員である上級魔性における共通した認識であったのだから。

4

「サティン！　ここに茅菜が来なかったか⁉」
血相を変えて飛び込んで来たラエスリールに驚いた様子を隠せない姉同然の捕縛師の表情から、ラエスリールは「外れだ」と確信した。
「どうしたの、ラス？　何があったの？」
詳しい事情を知りたがる部屋の主に、いつもであれば考えられない「すまない、急いでるんだ！」の一言で済ませたのは、彼女なりの危機感があったからだ。
なぜだかはわからない——だが、このまま放っておいたら、あの村の子供たちの想いが詰まった向日葵の種は大変なことになってしまう。
理由はわからなくとも、危機感だけはひしひしと感じ取れる。

「すまない、説明は後で！」

叫びながら、ラエスリールは心当たりと呼べる第二候補の部屋を目指した。

「セスランさまっ！　茅菜がここに来ませんでしたかっ⁉」

こちらの反応は、サティンのそれとは少し違っていた。

「来てませんが……その様子ですと、早速何か悪戯を仕掛けたようですね」

ブロンズの髪の捕縛師は、泰然自若とした態度を崩さない。

「……あの、えー……悪戯と言えるのかどうかはわかりませんが、以前依頼で向かった村の子供たちが送ってくれた品を持って……」

「確信犯ですね」

ずばりと言い切り、戸惑うラエスリールに同情的な目を向けた。

「多分、わたしやサティンのところには絶対持ち込まないでしょうね。わたしたちはあなたについてあれこれ情報を持ちすぎてます。間違っても迂闊な扱いはしないことぐらいは読んでるでしょうから、彼女があなたの大事な荷物を攫って持ち込むとしたら……」

彼の言葉を最後まで聞いていたら、ラエスリールはもしかしたら違う判断を下せたかもしれない。

だが、焦りに焦っていた彼女は、やはりセスランの発言の途中で部屋を飛び出したのである。

……そうして、的外れな場所ばかりに駆けつけることとなったのだ。

「義母上……！　まさか、ここに茅菜が⁉」

「……いいえ？　来ていないけれど、何かあったの？」

「……いえ」

ラエスリールは考えた。

セスランの言葉を真剣に、どこまでも真剣にぐるぐるぐるぐる考えた。

……考えすぎた。

その結果――彼女は涙を呑むこととなったのだ。

考えることは大事である。

だが、考えすぎることは落とし穴に落ちる危険も孕んでいる。

その教訓を彼女は我が身で体感することとなったのである。

※

魔性というものは、そもそも知恵が働くようにできている。
下位の小鬼や妖鬼については単純な欲求に忠実でその限りではないが、上位に位置する彼らは確実に人間以上に頭を使う。
それは、持って生まれた強大な力をゆえのこと——単に力を揮うだけでは面白くないと考えるのだ。
主にその知恵が悪いほうにばかり発揮されるのは、世界にとって残念なことだが、そういう意味で彼らは確かに知恵者ではあるのだ。
茅菜もその例に洩れず、後々のことまで考えた。
生まれて間もない彼女はしかし、自分の行為がラエスリールを怒らせるか悲しませることを充分理解していた。

ならば即座にこの悪戯を終わりにすればよいだけのことなのだが、そうするには胸に湧いた苛立ちは大きすぎ、素直に謝って返すという選択肢は最初から捨てている。

ならば、どうすればいいのか。

自分の溜飲を下げ、且つラエスリールの怒りもしくは悲しみを自分から逸らすにはどうしたらいいのか。

答えはあっさりと出た。

共犯者を作り、責任を分散してしまえばいいのだ。

その幼い容姿からは想像しがたい悪辣さであったが、彼女にとってそれは自然な選択だった。次に考えたのは、その共犯者を誰にするか、だ。

サティンやセスランやマンスラムといった年長者を最初に除外したのは、彼らが非常に気が回ることが想像できたからだ。無邪気な態度で容易く騙せる相手でないと彼女なりに見極めていた。

そうなると、選べる相手は限られてくる。

ラスに好意的で、ラスも好意を抱いていて、大失敗をやらかしても彼女が面と向か

って怒ることができない相手……と、なれば。

「……あいつか、あの子、よね……」

そう呟いたときのことだった——正しく脳裏に思い浮かべた二人の内のひとりの声が茅菜の鼓膜を震わせたのは。

「おい、姉ちゃんのそば離れて何やってるんだ？　いっくらお前が妖貴でマンスラムのおばちゃんに黙認されてるからって、あんまり好き勝手に動いちゃまずいんじゃないのかぁ？」

言わせてもらえば、それは邪羅も同じ立場のはずである。

護り手と認められてもいない魔性が浮城の内部を好きに動いているなど、本来言語道断の事態なのだから。

いつもなら、すぐにその旨を舌鋒鋭く反撃する茅菜だったが——今日ばかりは、違う。獲物が向こうから飛び込んできてくれたのだ、にんまりと人の悪い笑みが口元に浮かぶのを隠すのに苦労した。

ああ、何て良いタイミング！

内心を押し隠して、茅菜は邪羅に抱えていた包みを差し出した。
「あなたなんかに訊くのは本当に癪に触るし絶対やりたくなかったんだけどっっ！　ラスの身に関わるかもしれないことだから、我慢するわ！　これ、何だと思う？」
真剣な面持ちの茅菜の言葉に、邪羅もつられたように表情を引き締める。
ラスの身に関わるかも――というのは、茅菜が思う以上に邪羅にとって大きな鍵なのかもしれない。
そうして、茅菜が差し出した麻袋の中身を一摑み取り出したところで、彼は気の抜けたような声を上げた。
「なんだ、ただの向日葵の種じゃねえか」
「向日葵の種？」
ここで茅菜は訝しそうに首を傾げた――他愛ない演技に、邪羅が引っかかってくれるのを確信しているあたり、かなりあくどい。
果たして、外見だけはそれなりに育ってはいるものの、内情は単純で無邪気にできている乳白色の髪の青年は、いともあっさり引っかかった。

「なんだ、知らねえのか？　栗鼠とか小ネズミの餌に使われてるんだぞ。あとは……」

「だって、ラスは栗鼠も小ネズミも飼ってないわ！」

それなのに、こんなに送ってくるなんて、やっぱり不審なんじゃ――との懸念を滲ませた茅菜の台詞に、邪羅はまたしても乗せられてくれた。

「あー、じゃあ、あれじゃねえのかな」

「あれ？」

無邪気――そう――に首を傾げる茅菜の姿は、文句なしに可愛らしかった。到底、内心してやったりと思っているとは想像もつかないほどに。

まんまとしてやられていることに気づかない邪羅は、「やっぱ、まだまだ経験不足だよなー」などとどことなく嬉しそうに洩らしながら、「あいつも一度食べてみたいとか言ってたからちょうど良いか。ついて来いよ」と言ってくれた。

どうやら共犯者を増やしてくれるつもりらしい。

願ったり叶ったりだわ。

黒い笑顔を完全に隠しきって、茅菜はいそいそと邪羅の後に従った。
真相を知った後の彼や彼が巻き込む相手が抱え込むことになるだろう苦悩や慚愧（ざんき）など、茅菜には関係のないことだったのだ。

5

「リーヴィ！　まさか、まさかとは思うんだが、ここに茅菜が来なかったか？」

ラエスリールが浮城におけるリーヴシェランの部屋を訪ねたのは、親しい知己の中では最後のほうだ。

なぜかと言えば、出会いの当初から茅菜とリーヴシェランが衝突していたのを目の当たりにしていたからで、まさかあれほど喧々囂々とやりあっていた相手のもとに茅菜が逃げ込むことはなかろう、と思っていたからだ。

だが、だが、しかし――。

「あ、ラスーっっ！」

自分の悪戯などはなから忘れたような無邪気な笑顔で出迎えてきた茅菜の姿に、ラ

エスリールは自分の読みの浅さを思い知らされた。

「ち、茅菜……あの、向日葵の種は……」

どこにあるんだ、と口に出すより先に、ラエスリールにかけられた声があった。

「姉ちゃん！　ちょうど良かった！　今、呼びに行こうと思ってたんだぜ！」

嬉しそうな顔で、リーヴシェラン専用の竈の置いてある小部屋から顔を覗かせた邪羅の手には、漆黒のフライパンが握られていた。

そして、その中にあったのは――。

香ばしい匂いが、部屋いっぱいに広がっている――その正体を目にした瞬間、ラエスリールは気が遠くなるかと思った。

フライパンの中でから煎りされていたのは、どう見ても向日葵の種だったのだ！

「じ、邪羅！　それ……その種……！」

どうしたんだと、今更問いただすのも空しいと思わないでもなかったが、ラエスリールとしてはどうしても確認しておきたかった。

しかし――。

「珍味って言われる意味がよくわかったわ。向日葵やカボチャの種って、から煎りすると美味しいとは聞いたことがあったけど、カラヴィスの公宮ではいくら頼んでも出してもらえなかったのよね。確かにちょっと変わった味だけど、かりかりしてて美味しいわ」

そう言いながら、カラヴィス公国公女である少女が、一粒、また一粒と殻を割った向日葵の種を嬉しそうに口に運ぶ姿を目にした瞬間、ラエスリールの顔が泣きそうに歪みかけたところで、止まった。

鉄面皮、何を考えているかわからないという理由で、周囲から距離を取られることの多い破妖剣士は、実のところは身内と認めた存在にはとことん甘くできており、相手を傷つけるかもしれない真実を突きつけることさえ躊躇う甘さを持っていた。

「そ、そうか……」

何気なさを装って、そう答えるラエスリールの態度に邪羅とリーヴシェランが不審を覚えることはなかった。

まさに茅菜の一人勝ちである。

だが、茅菜はそのとき、してやったりという気分を味わうことができなかった。自分に関係のないところでラエスリールが浮かべた笑顔が、どうしても我慢ならなかった。だから、その元凶である向日葵の種をラエスリールの恨みを買わない方向で処分した——それはうまくいった。

いったはずなのに、茅菜はその時、心のどこかに凝りが生じるのを覚えた。

気にするほどもない、ほんの小さな心の凝りは、けれどずっと長いこと、茅菜の心を縛り続けた。

エピローグ

後日――。

翡翠の妖主との戦いの最中、長らく行方が知れなかった自称護り手である青年との再会を果たした彼女が連れて行かれた一面の向日葵畑――。

彼女が父たる王蜜の妖主を連想し、それゆえに好きだと思う向日葵の黄金の海の中に、数本だけ、異なる場所で生まれた種から生じた花が混じっていたことを知るのは時を支配する深紅の青年のみである。

から煎りされた種の幾粒かの時を戻し、向日葵畑の中に紛れ込ませた――。

それはもしかしたら、傲慢な魔王なりの謝罪であったかもしれない。

だが、それはあまりにもわかりにくく、伝えたい相手には伝わらない。

否（いな）――。

伝えたいとも思わなかったのかもしれない――。


もし破妖が学園ものだったら
親を亡くしたラス子ちゃんは養母のつてで浮城学園に入学
とりあえずいじめられます
むかつくんだよ
表情には出なくともひとり落ち込むラス子――
破妖の剣
featuring 松元 陽


そこに現れる
学校一の風来坊
闇主先輩！
おまえの力は
学園一だぜ


怪しい化学教師
セスラン
仲良し2人組
邪羅&リーヴィ
世話焼きの
保健医
サティン
学校の
ひとたち
なぜか
絡んでくる
エリート校の
ひとたち
藍糸
九条
白煉


結局 傷だらけに
なりそうな
ラス子ですが
頑張ってほしい
ですね！

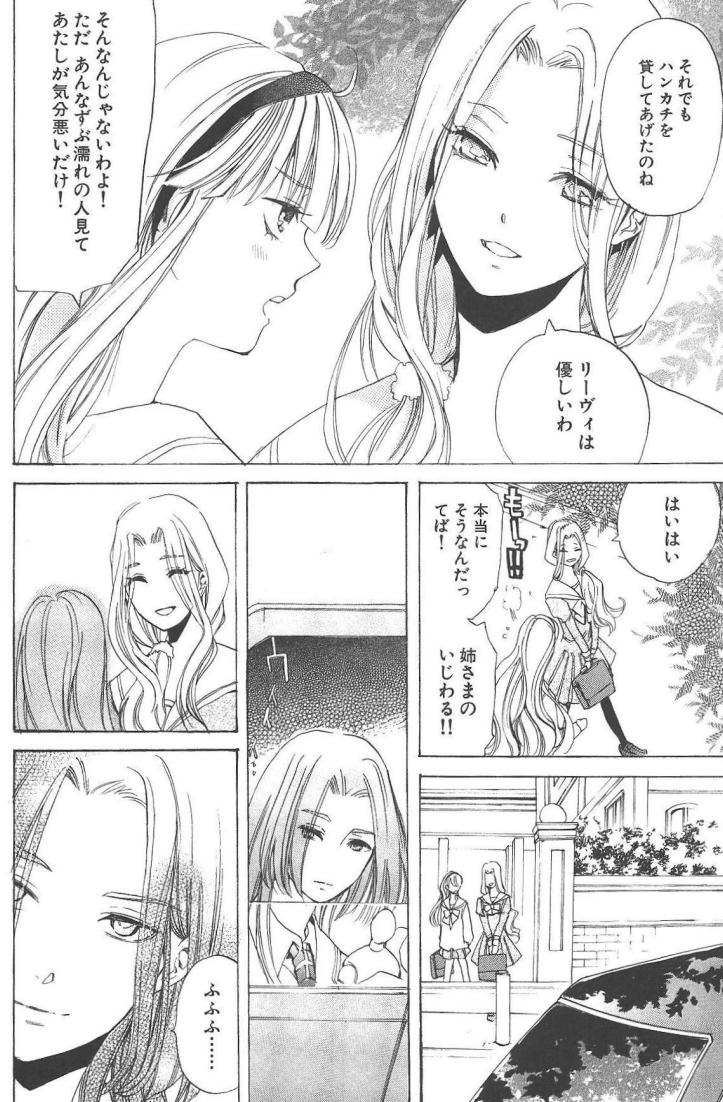

マンガ
破妖★学園1
ラス子はふり向かない
松本T陽
コーーーン
カーン
ラ――スっ


闇主先輩…
「闇主」でいいって言ってるのにー
それはちょっと…
え――っなんで？
恥ずかしいから？
……
他にも面白い人ならたくさんいる
私なんかにつきまとっても仕方ないでしょう
迷惑なんです！


きゃっ
ラスは一番面白いよ
ラスの隠れた力にそのうち誰もが惹きつけられるかもね
じゃ
なんだあれは……
フッ
ゴゴゴ
ギリギリ…
スカしてんじゃないわよ——
理事長のお気に入りだからって闇主先輩まで！
いやらしいわっ
そーよそーよ
わ私は…
これで頭でも冷やしなさいっ！
あんた生意気なのよ！


見てあれ
びしょ濡れよー
いじめかしら？
ヒソ
ヒソ
ヒソ
ヒソ
お高くとまってんじゃないの？
無理ないよなあ
陰気だし
しゅん。
何故私は嫌われてしまうのだろう…
あ……
すまない
同じクラスのリーヴシエランだ
ものすごくいいところの末のお嬢さんらしいがよく怒っているところを見る


なんだ？
……
どいてっ!!
ドン!!
ずん
ずん
いただ…
ん？
お礼……
言わなくてはな……
見てる
こっちが
イライラ
するのよ！
それでね
そのラス子って
何されても
黙ってて

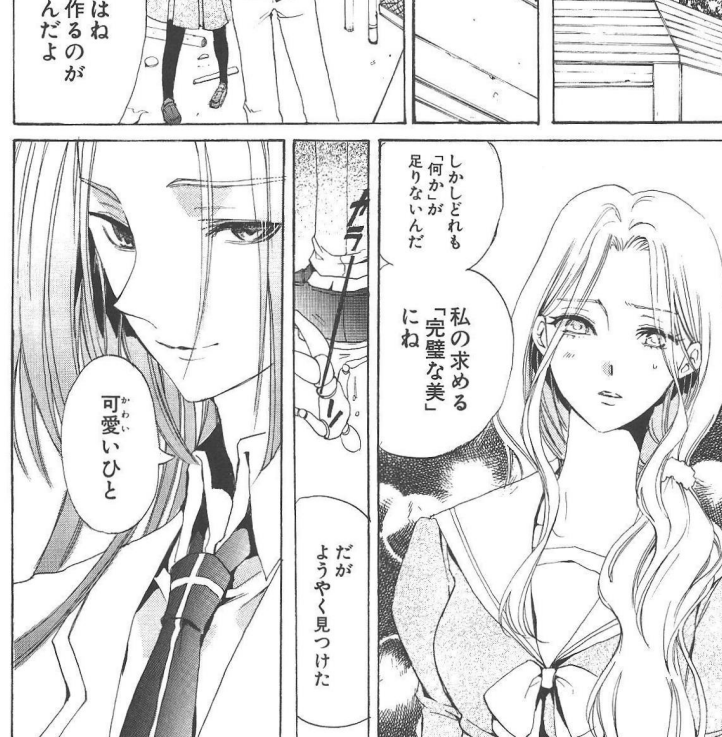

それでも
ハンカチを
貸してあげたのね
リーヴィは
優しいわ
そんなんじゃないわよ！
ただ あんなずぶ濡れの人見て
あたしが気分悪いだけ！
はいはい
本当に
そうなんだって
ば！
姉さまの
いじわる!!
ふふふ……


見つけた……
私のお人形！
その紫の車
止めてえぇっ!!
明日
返せると
いいが…
ブォォォ
!?
ハンカチ
洗ったはいいが
今日は
返すタイミングを
見つけられ
なかったな


リーヴ
シェラン!?
どうした!?
姉さまが…
さらわれたの!
「私の大切なお人形さん」
とか言ってたわ……
何をされるか……!!
ゴクリ…
変態じゃあ
ないか……!!
しかし
相手が車では――
相手なら
わかってるわ…
老舗の人形屋の
御曹司で
藍絲っていうの
人形集めが趣味の
とにかく危ない男よ
ふふふ。
裏の顔は
相当やばいってウワサ……!


でも行かないと…
姉さまは
あたしにとって
大切な人なの！
何かあったら…
あの男のこと
ただでは済まさないわ！
ブルブル
……
私も行く
な……
話聞いてた
の!?
危ない奴かも
しれないのに…
……
行かせてくれ
ばかじゃ
ないの…っ
時間がない……
急ごう！


ここなら
ゆっくり
話ができる
体育倉庫
……私はね
人形を作るのが
好きなんだよ


しかしどれも
「何か」が
足りないんだ
私の求める
「完璧な美」
にね
だが
ようやく見つけた
カラ
可愛いひと

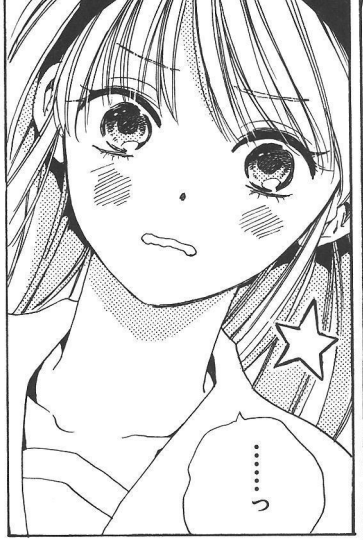

おまえのその姿をそのまま人形にすれば
永遠に美しい私のお人形さんにすることができる
ぱぁぁぁ
さあっ私に身も心も委ねるがいい!!
バーン
待てっ!!


この変態っ！
姉さまを
返しなさい!!
おまえたちごときに
何ができる？
邪魔は
させん！
ヒュッ
きゃあっ
リーヴシェラン！


もらった！
ぐっ…
このまま四肢を裂いてやる!!
！
糸が…？


ラス！ 今だ!!
!?
ダッ
ドカーン


保健室
もうっ!!
ラスったら
無茶するんだから
すまない
こんなケンカばかりしてたら今に大変なことになるわよ?
…驚いたあんたって強いのね
……あれは私だけの力じゃあない
……ありがと
まあとにかく
あなたのおかげで助かったわ



助けられたのは
こちらも同じだ

感謝している



あとがき

この本が発売されるころは、寒さが一番厳しい時期かと思いますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

『鬱金の暁闇』第十五巻をお届けいたします。

最終決戦を前に、今回は少々ヒロイン登場率が低めの展開となってしまいました。これからの物語のために、どうしても必要なことと判断してのことですのでご理解いただければ幸いです。

代わりと言っては何ですが、久しぶりにヒロインとヒーロー（と呼ぶにはいささか抵抗を感じるのは私だけでしょうか）のツーショットが実現しております。往生際の

悪い男に抵抗されて、なかなか苦労させられたシーンですが、楽しく書けました。読者の皆様にも楽しんでいただけたら嬉しい限りです。

同時収録の『向日葵の海』は読者サービス企画の小冊子に書かせていただいた短編に、その際枚数の都合で入れられなかったエピソードを加えたものです。時間軸から言えば『翡翠の夢』の第一巻のどこか……ぐらいです。懐かしい女の子が出ています……ちょっと腹黒くなってしまいましたが（笑）。

近況です。

今年も寒蘭の展示会に行ってまいりました。一年前とは違い、いろんな知識も仕入れたおかげで、いっそう楽しめました。凛とした高雅な佇まいと得も言えぬ上品な香りは、寒蘭の最大の魅力だと思います。

今回の原稿執筆中、気分転換に裏山を（猪の出没しない時間帯に限定してですが）散策していたのですが、低い山にも拘わらず、ぐるっと一周しただけで息が切れてしまった自分に愕然としました。原稿が終わったら、ちょっと運動して体力をつけなければ！

次巻からいよいよ最終決戦に突入の予定なので、それに備えるためにも体力は是非(ぜひ)つけておきたいところです。

今回も小島榊(こじまさかき)さま、松元陽(まつもとよう)さまを初めとする関係各所の方々に、大変お世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

それでは、また次の本でお会いできることを願いつつ――。

平成二十五年　二月

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10

集英社コバルト編集部　気付

前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のＢ型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第９回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金の暁闇15

COBALT-SERIES

2013年２月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

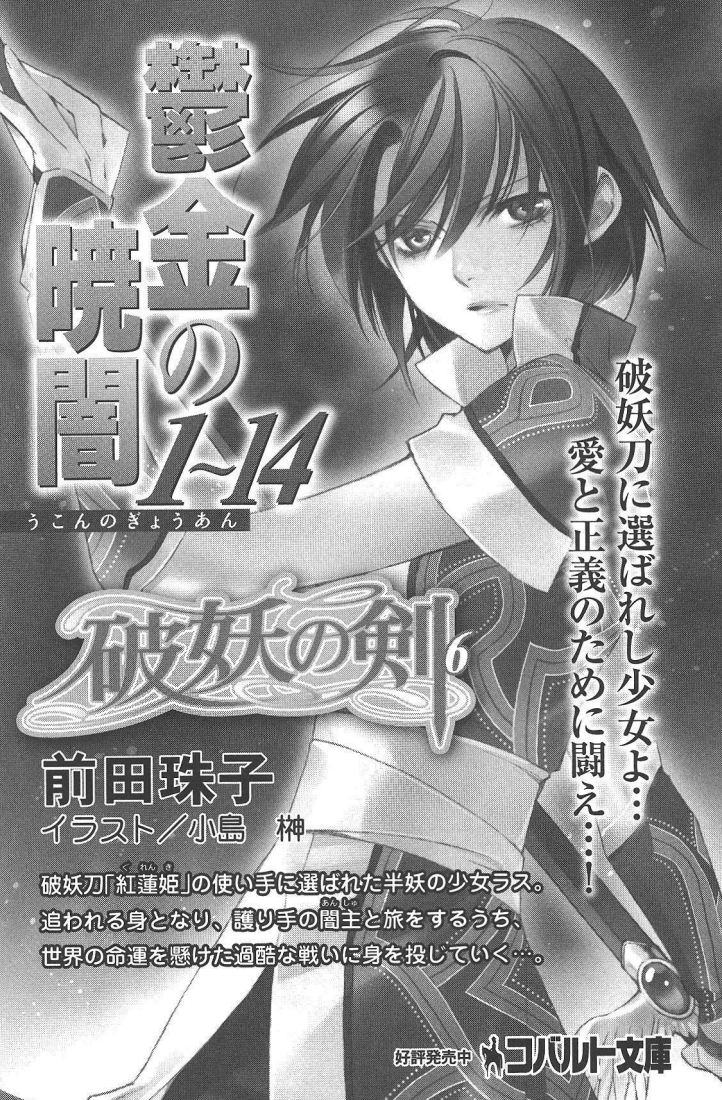
著　者　前田珠子
発行者　鈴木晴彦
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230)６２６８(編集部)
電話　東京(3230)６３９３(販売部)
(3230)６０８０(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2013　Printed in Japan
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601698-8 C0193


黄金の暁闇
1~14
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…!
破妖の剣 6
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖刀「紅蓮姫」の使い手に選ばれた半妖の少女ラス。
追われる身となり、護り手の闇主と旅をするうち、
世界の命運を懸けた過酷な戦いに身を投じていく…。
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島 榊
好評発売中 コバルト文庫


まんが版
破妖の剣
三
～霧魔の谷～
[漫画]松元陽
[原作]前田珠子
収録作品:破妖の剣
定価／440円(税込)
マーガレットコミックス
逃亡中のラスと彼女の護り手
闇主――旅の途中で
魔性に苦しむ人々に出会った
彼らは、力を発揮せずには
いられずに……!?

好評発売中!


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
狩人の宝
コバルト文庫
好評発売中



贅沢な身の上
だからときめきが止まらない！

我鳥彩子 イラスト／犀川夏生

妄想ムスメの花蓮（かれん）は、今日も陛下をお供に後宮を抜け出し買い食い＆冷やかし歩き（ウインドー・ショッピング）。すると、何やら訳ありな占い師と知り合って…？　表題作に加え、雑誌掲載作品も多数収録！

〈贅沢な身の上〉シリーズ・好評既刊

①ときめきの花咲く後宮へ！
②ときめきは海を越えて！
③いざ、ときめきの桃園へ！
④ときめきは鳥籠の中に！？
⑤ときめきは夢と幻の彼方へ！？
⑥さあ、その手でときめきを描いて！

好評発売中 コバルト文庫



霧の都の恋人たち
～貴婦人の恋は珈琲の香り～

小田菜摘 イラスト／氷堂れん

地主の娘ながら叔母の影響で職業婦人に憧れ、ナースになったアデライド。特別室に極秘入院している公国の公子クリスティアンの担当になるが、彼は術後の経過が思わしくないのに夜会へ出席したがっていた。反発を覚えるアデライドだが、それには理由があって…？

好評発売中 コバルト文庫



ひみつの陰陽師6

むっつ、無垢なる瞳は未来をうつす

藍川竜樹 イラスト／みずのもと

玲雅と恋仲になった真澄だが、あくまで男同士の付き合いと思いこんでいるため玲雅とかみ合わない。そんな中、玲雅は〈託宣の赤子〉を見極めるために高階家の出産に立ち会うが!?

〈ひみつの陰陽師〉シリーズ・好評既刊

ひとつ、秘め事だらけの宮廷絵巻
ふたつ、不運な姫君は百花の陰に鬼を飼う
みっつ、三日夜の餅をあなたと
よっつ、黄泉姫は愛を願う
いつつ、色にでにけり我が恋は

好評発売中 コバルト文庫

9784086016988

ISBN978-4-08-601698-8

C0193 ¥510E

1920193005103

定価本体510円＋税



コバルト文庫

死闘の末、父・王蜜の君に勝利したラス。世界の「破滅の鍵」を携え、五闇を従えることとなったラスには、第六の妖主である「雛の君」と等しく、新たな世界の「女皇」となる資格があると、父は認めたのだが。一方、ラスの母・チェリクが見上げる空には、巨大な亀裂が不気味に入って…!?　魔性による殺戮が、世界を赤黒く染め上げ始めている——。ラスよ、愛しき世界の破滅を食い止めよ…！